

44
275

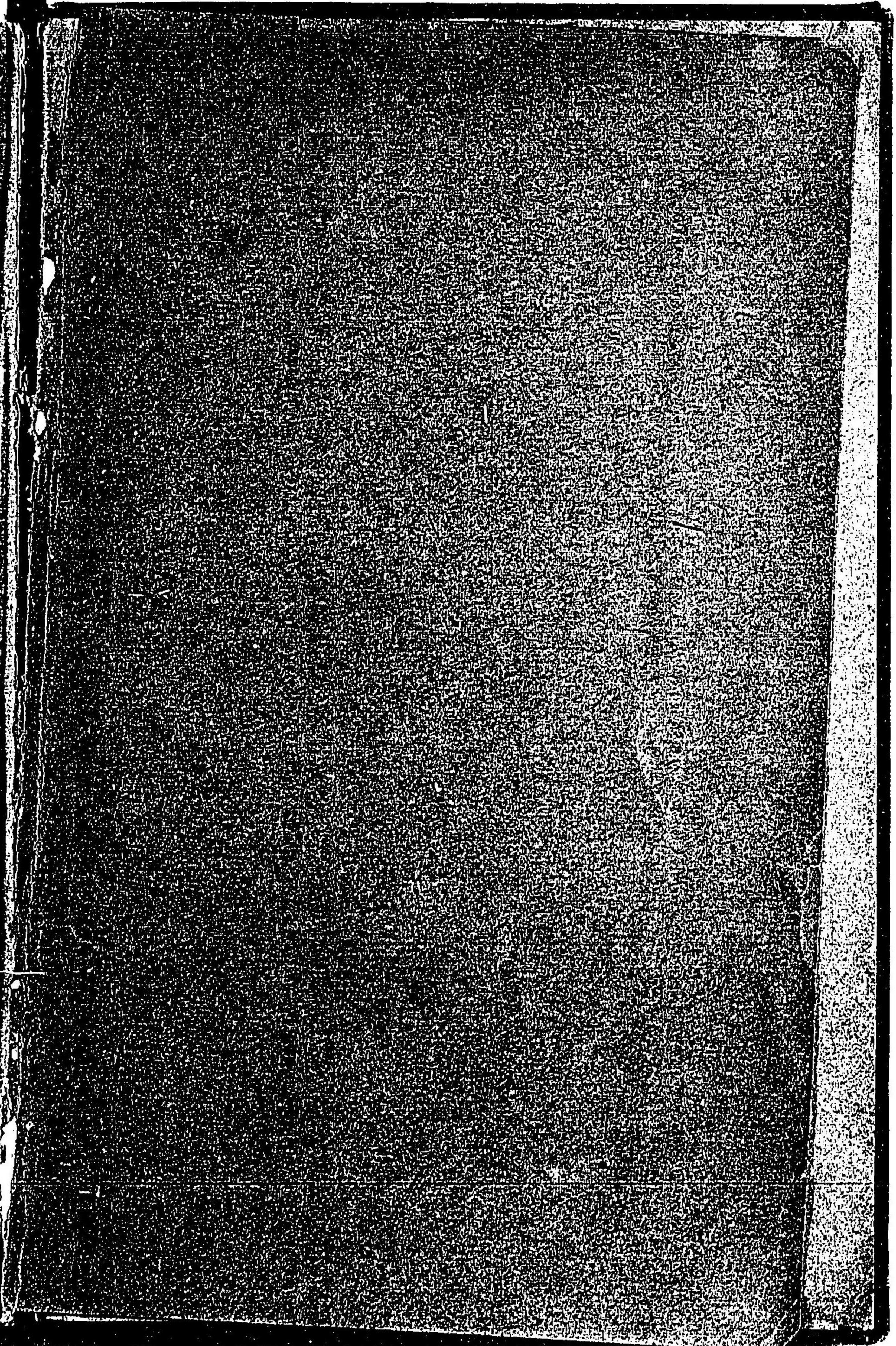
空王均遺業
延明養主人款著

字
血溪
志
日
道

東京

鳳林雅素

梅





自序

社會乃改良進歩と共に、一國政府も其政弊の在る所を改めて、漸次完
 全完備の政略ある事を知らしめざる可らば、就中未開の國に在ては、
 専横の弊有るが故に廟堂の上より立ちて政權を左右する者、權威甚だ
 強く、私權を専らにして、以て國民を蔑視し、以て民力の度を量る事な
 く、課税を重ふと、國民を苦しめ而して濫制人の權利を壓する事あり、
 是等未開國に於ては、此國民たる者壓制を甘んずる事能はざるより、
 相激動して、彼の壓制政府を顛覆せんとす、其目的や一國政府を顛覆
 するを主とするは非ずして、唯夫れ惡官汚吏の輩を誅戮し、良政府を
 組織し、國家忠實の臣を擧げ、之に天皇補弼の大任を擔はしめんと欲
 するに在り。
 嗚呼政府顛覆、實に是れ見るに忍びざるの一悲劇なり、此悲劇を演せ
 しむる者と誰ぞ、曰く惡官汚吏則ち是れのみ、彼れは奸臣あり國賊あり

り、唯だ彼れ有るが爲めに政府顛覆の止む能らざる事あり、誰か之を誅戮するの心あからんや。
朝鮮國亡命の志士金玉均氏は、慷慨の士あり其國の改良進歩を企圖し、大に爲す所あらんとして、國王殿下の忌む所となれり、其忌まるゝや我邦に流寓して、居る事數歲、時に今歲圖らざりき、上海日本ホテル中よ於て刺客の殺す所とある、余ハ氏と交りて親しく氏の言行を知る、今更悲惨の死を聞き深く悲む、余と感をお互するの士も亦た實に尠からざるべし、余ハ不日氏の言行を録して大に論ずる所あらんとす、此一巻の會て氏が笑談の中に斷されたるもの、今回圖らず遺案の如くありぬ、余ハ氏が我邦の事情に通曉せる一斑を知らむる爲め、之を公けにする事となれり、眺め來れば唯是れ一個の小史あれ共異邦の友の紀念とせば、見るべきものあしとせず、讀者之を諒せよ、

明治廿七年四月仲浣

飯田三郎識

小説 ころはれ梅

第一回

金玉均遺案 蚯蚓菴主人著



梅

夕日西に落ちて玉樓の翠簾浪の如くそよよと簷端かすめて小徑に通ふ風涼の遠田伯爵が向島の別邸嘉木珍石と數寄を遊せし秋の七草今を盛りと花の乱れて十三夜の宵月白く葉末の露も宿るも哀はれと庭下駄の音かき彼方こあたと徘徊ふ美人芳紀の頰ハ十七ばかり色くつきりと白く黒瞳がちの双眸無限の露を湛えて花も吐づべき飽はじき丹き唇さりと締りて愛嬌さながら溢るゝ如く髪は文金の高髻も結びて金脚五分玉の簪うつり好く身又河色か召縮緬の袷ふたつ重ねて纏もの、帯胸高に締め小萩をさそふ夕の風も雪の襟もと管めさせつゝ何か打沈みたる様子

二
 まて、つくづくと見入りたる折しも、柴垣の茂みを分けてツト走り出たる一
 人の女美人の目敏くそれを見て「清、まだお客さまのお揃ひあさらぬいかへ
 「ハイ、飛鳥川の殿さまと、錦の小路の若さまのお出遊ばしたとは、姫さまも傍
 存じで入らっしゃいますか、間もあく駿河臺の浄本邸から、弟兄弟お揃ひで
 お越し遊ばし、お姉さまよか目よか、とたいと先刻から尋ねてお出遊ばし
 ます、爾う美人は簡單よ答へたるまゝ、再び見むかんとせせず、装にこぼるゝ
 紫苑の花の一と、瓣静かよ拾ひ、里昂製ハンカチーフを白く細き指頭よ纏ふ
 て、露滴よ溜るゝ塵打拂ふ清と呼ばれたるの、銘仙の着ものよ、博多の帯太鼓
 よ結び、銀杏襦袢並よりは高く結ぶて色も小白く、剛強氣に柔順と見ゆる中年
 増、餘念もなき姫の横顔、チツと見詰めて「オヤマアお綺麗か、お花紫色の蒲公
 英でございますか、美人は僅かよ笑を溢し「エラ、厭紫色の蒲公英あつがある
 ものか子、これは子、紫苑」お春は思ひ出したるが如くよ吹出し「浄免遊ばせわ

三
 たくしは一向お花あつは存じませんもの、それは爾うと姫さま、松平の殿さ
 まが何時ややッレ華族會館へお集りの節、本庄の浄當主さまから何か内々
 で浄意見があつたと申しますが、姫さま、貴嬢あんの事だか、浄存じで入らせ
 られますか、姫の心動けり、我知らず振り返つて「ケケ」と清の顔をまより
 「何だか新聞よ出て居た、阿母アさまが何時やらお嘲であつたが、春、お前譯
 を知つてお出か、ハイ、嘘か何だか分かりませぬが、浄自分で、花街へ行つた
 と仰やつたさうでございます、爾んなとを仰やつて、マア何うなさるお積り
 だらうね、最初、随分言譯も遊ばしたさうでございますが、お附き申して
 居る中島強一と云ふ、色の黒い意地悪か方が、あんののかんのか、爲どかしよ
 壁訴訟をいたしましたさうで、殿さまも餘程お困り遊ばしたと、今お玄關側の溜
 りで、伴待のものがお嘲をいたして居りました、以前と遊つて此頃、大層品
 行がやかましいからと、能くお父さまのお嘲だが、内々でお済み遊ばして、願

お悦びであらふねへ「獨言いふが如くは語りつゝ垣を曲りて泉水の邊み、水も映らふ月影すかし隠めて、物案じ顔なる面色篤と見て「モシ姫さま何然貴嬢の、わたくしよまで、其様もお隠し遊ばします、永い月日と申すのでざりませぬが、斯うしてお側よ五年以來、伊奉公をいたします私、ソリヤもうお談相手よハなりませぬ、春かうく〜と仰やつて下さいますれば何んもよか嬉しう存じませうもの、姫さまもないお心強い遊ばしかたを、勿体ない事ながら此程からお恨み申して居りまする」姫は訝かし氣に此方を見詰めて「そんなよお前のお云ひだが、日常からして柔しうしてお呉れのお前よ、何もわたしに隠し立をするやうな、其様な覺ハ少しも亦いお春や、あんぢ氣も障ったことがあつたら、どんなにでも謝するから堪忍してお呉れよ、アレ、其様に仰やつて下さつて、何んども申し上げやうがございませぬ」云ひつゝ、四方を見まのし小聲よあり「モシ姫さま、貴嬢のお父さまからお観き遊

ばした寶石入りの指環の何う遊ばしました」姫ハ愕然として驚けり、見るゝと耳ハ紅を潮し眼に涙の露うるむ、先刻お晴着のお支度をいたしました時、何時ものお化粧筆筒を探しましたが、何うしたとか見當りませぬ定めしお箱ゆ遊ばしてございませうと存じましたよ、お見受け申せば左様でもよし、失禮ながら、高價のお品を、貴嬢マア何處へお仕舞ひ遊ばしました様子あり氣も問ひかけられ、姫ハ顔色青く唇顫はせ、「飛鳥川の叔父さまが、伊太利からお歸朝の折り頂戴いたした彼の指環の、お前も知つて居る通り鹿鳴館の夜會も箱めて行きましたか、何處へ何う仕舞ひ忘れをしたものか、行衛のいまだよ分からぬよ、眞よ困つて居るところ」口重氣も分疎するを、お清は聞いて打笑ひ「お遺失さへ遊ばさねば、急度出て参りませうが」と云ひつゝ、一際聲を憚かりて「姫さま、これは何方よお賞ひ遊ばした」白絹のハンカチーフよ何やら細々と書き散らしたるを、人知れず袂の影よりソツと出せば、姫

六
 は一ト目観るより倒ふればかり又打驚き顔色變へて差し俯視くこあた
 は尙もすり寄って何百名とある侈華族方の其中でも遠田伯と仰やッてハ
 か家柄と云ひ侈身代と云ひ誰も押されもあさらぬのみか、侈息女の梅子さ
 まと申し上げては衣通姫の再來かど、それはく下々まで侈評判の好い貴
 嬢さま、今若盛りの殿様がたが命をかけてお慕ひ遊ばすも無理では無いま
 せぬ間もなくお越じあされる筈の彼の沼田の殿さまをば、わたくしよま
 でいろくどか打明け遊ばしてハ、お慕ひあさるゝ程故、こんあお噂が夢よ
 も立ッて侈覽じませ、何んあ濡衣着せられうやも知れませぬ、ソリヤもうか
 柔順しい貴嬢さまのとどざりますもの、お心遣ひあどのかあり遊ばす筈
 はどざりませぬが明けても暮れても其様は沈鬱いではッかりお出遊ばし
 ては、奥さまが何んなよお案じあされませう、何うせお話相手はあります
 まいが、膝ども暇合と申す事も侈座いますから松平の殿さまを、何んとか思

七
 召して入らッしやるあら、何故お断し遊ばしては下ざりませぬ、姫は氣遣は
 しび又四下を見まはし、松平の殿さまを、お前マアとッつけもあ、其様
 かと何うしてわたしに「イエ、く、何んと仰やッても不可ませぬ、斯うして
 春がチャンどお暇み申したからは、所詮お無駄でござります」アレサまだ爾
 んな無理をとばッかり後生だから情願疑ひを晴してお呉れ、左様あら此様
 よ申しましてもお断し遊ばすといなりませぬか「覺のあるとあら兎も角も
 何んとも思ッては居ないもの」よろしうございます、爾んあもお断し遊ばす
 あら恰好お本宅からお越しの武雄さまよ、この手巾の横文字、おんど書いて
 ありますか、讀んでお貰ひ申しませよ「故意とすげあく云ひ放ち、其儘行かん
 ど立かくれば、姫は俄かよ追ひ廻り」武雄さんあど讀んで貰はずども、よウ
 く分ッて居るで、あいか、學校のお友達から戴いたこの手巾、おにも不審は
 あいではないか「サア、其か友達からお戴き遊ばしたか手巾よ、殿方のお手障

で誰が松平どか書きをさせました、「エッ」人に勝れて彦容貌好くお氣質も凛々として何處へお出なすつても彦評判の好い殿さまのお噂が年輩の程もか
 似合ごうかと影があら存じて居ります私さんの悪うは思ひませぬが萬一
 した間違から無いお噂でも立ちましてはど、お察し申して此はさから段々
 彦様子をお察し申せば、彦銃獵のお歸りどやらよて毎日松平さまも此あた
 りをお通りおされれば、貴嬢さまもまたお垣根越しよお心お配り遊ばす彦様
 子彼の殿さまもあれ程までお焦がれてお出遊ばすもの、お可愛さうよと春
 の疾うから存じて居りますに彼のお方が、花魁狂ひを遊ばすおとど無
 お噂が立ち升るも、全然姫さまへのお心遣ひ、お氣の毒でござりませぬか
 黙然として俯視きたるま、言葉なき姫は今更耻かしく「爾う何もお前が知
 ってお出なすつて明かして云ひますが、お父さまへの素より阿母アさま
 よもかならず、お耳に入らず居てお呉れ」なんの〜私よ爾んを彦心配の

要りませぬ、サかう〜と嘸してお聞かせ遊ばしませ、お爲悪しうのいたし
 ませぬ、爾んお前をツと笑つてお呉れでないよ、「云ひ出んとして」お噂
 る折から聞き馴れたる聲色よ笑ひ興じつ、四ツ目垣を曲つて此方へ来る
 の今の噂よ其名知られし子爵松平定成、夜目よ的確と見へねど、年齢のころ
 廿三四を出ざるべし、色白よ眉秀で、鼻筋通り、キリ、と吊りし眼尻よ云は
 れぬ一種の笑を含みて、身よ綾羅紗佛蘭西縁のモーニングコートを着し
 金剛石の襟飾キラリ〜と月よ光らせ、十一二とも覺しき少年の手首軽く
 握つて、何やらん蹴れながら近寄るを、姫の見るより打驚き、忙はしくお春を
 急ぎ立て、柴垣傳ひに逃げんとす、此方へ少年目敏く見とめて、「アレお姉さま
 が」聲高よ呼ばれて端なく隠れも得せず、お春のうしろよまわりて小隠れす
 る中早くも子爵の傍へ前み、それを見るよりきまり悪氣よ「これの令嬢の彦
 散歩とも存じませず、飛んだ失禮をいたしました、サア武ちゃんお坐敷へ行

ッて骨牌でもいたしませう」少年ハ打首肯き再び手を取り行かんぞとすお春
 ハ何かもひげむ氣もかろくと聲を掛け「モシ殿さま何んの遠慮も及び
 ませう、存じ遊ばす八重子さまでござります、他人行儀も仰せられずと、マ
 ア築山の四阿へでもお出遊ばし、姫さまと一所にお月見なりとなされま
 せ、イヤ有難いが、まだ少ツと彼方に用事もあれ、爾う遠慮遊ばしては、何
 々か連れ申さねばなりません、ホニニそれ、若さま其か手をチャンと握
 ヲッてお放し遊ばすな、姫さま貴殿が黙ッてお出遊ばして、お客さまが、心
 配でござります、少と接待をさされませ」絶ッての勤め、姫は素より子爵
 も飛び立つばかりの嬉しさ、何氣もなき体、装ふて四阿屋の軒より立ち寄り
 研ぎ立たる焼もの、臺に腰をよろせば、清は草花折ッて参らすべしと、少年
 の手を引いて花壇入りぬ。

第 二 回

葉越しの月名殘なくさし入れたる四阿屋の裡、丸き紫檀のテーブルを距て
 座したるまゝ、子爵も一言の會釋なければ、姫は尙更ら女氣の只だうぢく
 と鼻白む、暫くして子爵ハ儘かよ意を決し、躍る動氣を我と押へて四下輝か
 る聲低く「お葉さま、お腹がお立ち遊ばしたら、珍堪辨を願ひますが、先夜鹿鳴
 館でさし上げました手巾の文字、あれは何んと、判断くださりました」怖々
 ながら流石男の心強く、きッぱりと問ひかくれど、此方はいよく「耻らふの
 み振の袂をたゝみつ返へしつ、顔あからめて俯視く姿、今咲き出し初花の匂
 ひ溢る、可憐らしき、子爵ハさながら酔えるが如く、黙ッてお出さるのハ
 珍承諾下さらないのを見なます、生れて廿四の今日まで戀を云ふと、微塵
 おぼえのない私、稠人廣坐の其中、大膽も程のあるべき彼の附文も、と
 より身不肖のわたくし故、お厭を仰やるも決して、無理と存じませぬが
 未だ、返辭も下さらず、家來のもの、疑はれまして、お耻かしい、噂せら

れそれで夢の覺めぬとい、我身がら相愛もこそ盡きたる譯、とい申すもの、何も貴嬢のお心ひとつ、お厭を覺し召すもの、何んぞお願ひ申せばとて、返辭の出來やう等、いさし所詮、承知くださらず、それ迄のこと、此舌切れても二度と、いお通り申しませぬ、モシ梅子さま、たつた一言の、挨拶、仰やッて、い下さいませぬか、エ、モシ梅子さま、「いほく」として、問ひかくれば、姫も今は、意をさだめ、不束あるわたくしを、それ程迄、仰やッて下さるお婿し、女子の身よと、笑冷みでもござりませうが、返辭の、疾うよいたしてござります、意外の言葉、子爵の不審と、眼を丸め、「エッ、返辭の、疾うよ、シテそれは、何處で、誰よお渡し下さいました、」ハイ、彼の、晚舞踏を、傍遊ばすとて、わたくしの傍にお出あそばした時、左様か、傍へ鳥渡参りましたが、誰よお渡し下さいました、粗末な品で、いざいざ、ボツケツトの中に、そッて入れて置きました、子爵の思はず、莞爾と、打笑ひ、彼の、晩邸へ、歸りまして、直ぐと臥

ッて仕舞ひました、が、翌朝女どもが、指環が、這入ッて居ったと申し、部屋へ持ッて参りました、何を、何うして、這入ッて居たことか、實は、不審な存じて居りました、爾んなら、彼れは、貴嬢から、私へ下すつたのでございませうか、ハイ、お氣よ、召さずば、情願お捨あすッて下さいまし、「云ひつゝ、そッて、眼を上げて、盗むが如く、子爵を見遣、又、耻かしさ、と、袖飄へして、顔かくす、子爵は、嬉しき、氣も、そはく、と、我を、忘れて、前み寄、頭ふ、左手を、差し、延ばし、姫の手首を、緊々、地と、握、顔見合はせて、微笑む、折しも、」アレ、沼田の、叔父さまがお出なさいました、清や、早くお姉さまをお呼び申して、来てお呉れ、疑ひもなき、少年の、言葉、姫は、慄然と、身を、頭はせ、「エッ、沼田さん、」思はず、聲を、振、立、つれば、子爵は、手早く、目顔、制し、「ア、モシ、お辭か、よ、おされまし。

第 三 回

中洲林流館の奥二階ふた間を借受け、傲然と上座、よ、席を占むるは、陸軍大

十四

佐沼田男爵耳よと題にかけて一面は溢れる鬚は宛然むぐらの如く日又晒し雨は打たせて銅を欺く丈夫の顔はヒカリく〜と鑑める眼の物凄し大佐の右手は持ったる大形の琥珀盃ぐつと飲干し向ひ合はせよ坐したる四十餘の男は渡し太田今云った事の屹度引受けて呉れるかね伊念にやア及びませぬ何んの主人だあすと確見たとともない修維新前の熱を吹きましても三十年來叩き込んだ此腕で急所はキナリと押へて置きましたイヤそれは乃公も承知して居るぢやが聞けば届け済みよあつて居ると云ふぢやアあいか此方は一と口飲んで冷笑ひ他人の女房と荒かた極つて居るものを横合から奪ひ取らうと云ふ大佐にもない其弱腰なんの届け済みになつて居やうが居まいが高が世馴れぬ青二才四の五の云はしてたまるものか「ウム流石の中嶋強一ぢや沼田威服いたしたハ、爾う持上げて下さらずと正可の時よ必ず御助勢を願ひます」なんの其事あらば案じるを其處の旨

十五

く自分が周旋してタンマリ汗を汲はせて呉れるワ首尾好く運が向きますれは相應の御用はこの中島きんどか聞き申します「イヤ爾うある時の土臭い洋服なぞ脱いで仕舞ひ年中湯治の遊山のと八重子を連れて氣儘三味此奴旨過ぎる噺しぢやナウ」大佐は左も心地好氣よ大口明いてカラ〜と笑ふ此方の手を拍ち鳴らして酒を呼び速りと盃を傾けつゝ何やらん考へ居りしが忽ち横手をハタと拍ち「イヤ好いものがあるワ〜、モシ大佐これを何んだと覺し召す」懐中を探つて小形革張の篋を取り大佐の前に差し出せば醉眼はサロリと裡をながめ「何だと云つて只の指環さ」素よりそれと違はございませませんがどつくと裏の彫刻を珍覽なさい「大佐は眼を圓まして熟視せり」ヤ、これの遠由の紋所ぢやノ「サア其紋所の指環の持主が彼の馬鹿殿の二才とハ大佐小癩は障つてたまりませぬ解ふて倍々紅き大佐の顔は見ろ〜赤銅色を變じて頬鬚逆立んばかり齒をキリ〜と噛み鳴らし

て此方こなたもむかひ「コレ中島なかじまさんど云ふ此指環この指環の持主もつぬしが松平まつらへとか、フム察さつする
 ところ彼奴等あいつらふたりは、疾はやうより通つうじて居ゐたを見ゆる、エ、思おもひし、いの、かの
 れ小悴せせがれの定成さだちかめ筋骨しんくわう抜ぬいても不足ふそくな奴やつ今いまよかもひ知らせて呉くれるが「太息たいき
 を吐つきて憤いふれば、中島なかじまは故意こぎと落着顔おちつきがほ「今いまにちつて何なにんとか騒さわぎあすつて
 も、こりやア十日じふにちの菊きくと云ふものだ、くだらぬとは非ちつと思おもひ切きつて仕舞しまひ、
 彼の上玉あの上玉を巻まき上げるが何なにより剛好ごうこうでございませうよ」シテ其手段そのしゆだんと云ふ
 は「そりやア段々だんだんございませすが、先まづ第一だいいちは「と云ひつゝ、其處等そこらふり返かへり、何事なにごと
 なるか耳みみに口寄くちよせ、呷くき居ゐたり」モシ中島なかじまさま、下座したざ敷しよお待まちかねのお容ようさま
 だ、マダ御用ごようは濟すみませぬか鳥波とりなみお聞き申まをしてと、最前さいぜんからお尋もとねでござり
 ます「何時いつ来きりしか女中にようぢうの聲こゑも、兩人ふたりは慄然りよくとせしが中島なかじまの此方こなたを向むき「只今ただいま
 参まゐると申まをして呉くれ」大佐だいさは鬚ひげかき撫なて苦笑くせうせり「イヤ何時いつじても色男いろおとこの賣口うりぐち
 は違ちがつたものぢや、併ひし能よくある類例るいれいぢや、戀こゝろも現まを抜ぬかした上で、此方こなたの工たく

の段々だんだんを曉しや舌したつて仕舞しまふと云ふやうな、爾そんな頼馬たのまの仕しやアしまわ「中島なかじまは
 故意こぎと眞面目まじめを装まひ「大佐だいさぢやアございませう、何なにんのツケに色いろの戀こゝろの
 と、爾そんな氣樂きらくも嘸はぢやアございませぬ、實じつは貸借上かいくわうじやうの相談さうだんで少ちつと秘ひ密みつよ
 算盤そろばんを取とらぬばならぬ、大野おの春筋はるすぢでございませう、何なにんを野暮のぼろを嘸はだか分わ
 つたものぢやアありやアしあいが、貴様あなたもいそぐと云ふ譯わけあら、今日けふは之これ
 で歸かへるとしよう、それぢやア大佐だいさ先刻せんこくの一件けんは抜ぬからぬやう、手筈てはづを間違まちがへ
 ては不可いけませぬ、そりやア萬々承知ばんばんしやうちだ、イヤ嘸はも浮うかれて思おもはず、大酒おほしゆを飲のん
 だと思おもひ、滅法めつぱう酔よつて參まつたやうぢや「爾そんなとして立ち上あり、衣い袴はかまよかけし
 着きものを取とつて身みを繕つくろひ、紙幣しへい幾枚いくまいか投なげ出したるまゝ、中島なかじまの案内あんないに送おくら
 れて待まちたせ置おきたる腕車うでぐるまの上うへに「轉まぶが如ごとく乗のり移うつり、揚あぐとして芝公園しげこうえんの
 自邸じていを差さして驅かけ出だせり。

中島さん、お前も餘まり酷いぢやアないか、あんば用があるからと云ッて、
 「これ六時又程もあるまい、正午から獨りで待ッて、夕覽を、何んあものだ
 か少ッとは味が分からうわね」あまね調子よ口説き立つるは、色白メツプ
 リと肥えたる四十前後の女、髪は切下げの根茶筌よ結びて、髪よ見せたる櫛
 の痕艶々と得からぬ香したる如く、剃落したる眉の青々どむかしの名残
 今よとゆめて、あるか無きかの薄化粧こゝろ憎く、お納戸絞縮緬の重ねも唐
 草を縫漬しよせし茶綴子の被布、帯は故意と縞子の幅細を無双よして、松葉
 散らしの金のボタン閃々と光らせ、端然として坐しぬたるハ姿よ似氣あき
 物の言標訝かし、中島ハ忝しく辞義を行ひ、「後室、お言葉ではございませぬ、ぼ
 存じで入らッしやる通り、沼田大佐と云ふ底拔上戸よ出逢ひまして、散々
 手を勤めさせられ、ハイ遅くありまして、何ども申譯がござりませぬ、何うや
 ら爾んな様子であつたが、沼田と云へハ永胤が妻女と約束の極ッて居る、遊

田家の娘子よ、大層打込んで居ると云ふ噂さ、もしそのとが眞説あら却ッて
 都合が好いではあいか、「何で、ろさく云ひ掛くるを、中島ハ周章て押し止め
 次の間の襖スラリと明け放ち、庭先廊下一順よ見まはし、「野暮よ大きな聲だ
 のう」ホンニこりやア私が悪かつた、馴れて見れば遊ばせの何うの斯うのと
 自裂休は、五月蠅い言葉も、お茶を濁して二十年、不思儀と隠して居るもの
 と、斯う羞し向ひよなッて見ると、ツイお噤舌が出ますのさ、「お噤舌を遣るの
 は、掛やアあゝい、何んぼ新枯の秋だと云ッて、鹽湯を目的み入り込むもの
 もあるぢやアないか、飛んだ言葉の端緒から、何うバレまいものでもあし、滅
 多あとは云ひあさん、最初よ似合はぬ馴々しさ、女はホ、と打笑ひ、「誰が立
 ち聞きなぞをするものかね、從者よ連れて來たものも、木挽町の夜芝居が見
 たいと云ッて先刻こゝを飛び出したから、十時までは安心だよ、マア何んよ
 しても静かよするが好い」談話あかばよ女中の謎の料理ところ狭きまで持

運び故意と兩人は酌を頼みて襖の外へ退きぬ中島のニヤリと打笑ひ「イヤ
と粹を通しやアがる此奴は知ツと番發まにやアあるめへのウ」云はれて女
は得意氣ふ「其處に如才があるものかね疾う薬はかつて置いたがそれと
もか志がありますなら御勝手次第遊ばせさ」へん氣障を文句はよして吳
れ爾んあんぢやアねへや「イヨ大音羽屋かね」ハ、併し此方は伊豆屋の與
三郎でウブも外より所得があくて其方が名代のか富だから乃公ア安心と
云ふものだ「オヤ何處も爾んな與三がありますえ操と云ふのも野暮な奴だ
が隠居が死んで髪を切り煎香玩りをして居るものを何んの彼んのと仇あ
文句を殺して置いて其方が名代のか富とは中島さんそッやア少ツと筋が
違ひませうよ」通やア違ふで宜いぢやアないかこれが生一本の奥様と云ふ
ぢやアあし素生を洗やア傀儡師の髑髏箱を見るやうに鬼が出るか蛇が出
るか何だか分かつたものぢやアねへ「微醺機嫌の申戲も女は口惜しくキリ

と眸を吊し上げ「澤山素生をお調あさい松平家の執事某と云ふ立派な肩
書のあるお前さんだから何うせわたしのやうな三平二満はお氣に入らな
いのは御道理さ四十面をさびて居てマ孩兒も同様に娘も現を抜かして
居る沼田大佐と御一所にお氣を召した奥さまをお迎へおさるが好うござ
いませう」むツとして背けんとする膝手早く中島はすがり留め「爾んな口説
の真似事しようど此處へ落合ッた譯ぢやアあし何時までブツ腹を立
て乃公にはッかり氣を揉ませすと何んとか氣休めの一ツも云ッて呉れて
も好いぢやアあいか」その氣休めあら此家も居る先刻の婢女が早手まはし
さ爾んな氣の利いた口前はわたしの畑もやアありアしあいよ「コレサあん
で野暮も太るのだ申戲も大概よして置くが好い申戲事ぢやアありやアし
あいよ」斷然と云ひ放ちて立んとすれば中嶋は故意と眞面目になり「これ程
云ッても分からぬらお前の勝手よするが好い人ももしろくもねへ何ん

のさまだよしんば門番した身でも男は氣で喰ふ裸躰百貫、あんまり安く見
 られちやア、これから出世の妨げだ厭から厭で頼みやアしねへ決して頼む
 と云はねへから、歸るものならサツサと此處を飛び出し、そこらあたりの
 宿で勝手お夢を見るが好いや「有合ふ盃ぐつと傾け、尙ほも飲まんと銚子
 三本盃洗ふ移し、波々と溢るゝばかりの大杯、兩手まさゝげて今一と干しと
 飲みかくるを、此方は見るより抱き止め「アレサ中島さん申儀だよ、斯んまよ
 飲んで何うします、エ、お放しと云へば中島さん、マアお前も餘ッ程お剛情
 だねへ」やうくにして、もぎ放せば男はいよく「不足氣に惚れた弱味へ附
 け込んで、歸ると云ふのを威嚇文句も遣はれちやア、何んで素面で居られる
 ものか、餘計お世話を焼か、いで用がきければ歸るが好い」ナアニ威嚇文句
 よ何うの斯うのと、爾んお籠置は少ツともないが、お前の憎体口が過ぎるか
 らと「憎体口おは乃公が氣質だ」アレまた爾んな剛情を最う好い加減によし

てもお呉れわたしが悪うございましたと斯う謝まつたらお前勘辨しても
 好いちやア、あいかナアニ勘忍するもしねへも、あいな、慥だが彼様又殿しく遣
 られては、此方も男の意地づくに、辛い思ひをし、あがらもツイ云ひ過すと云
 ふものよ、それは兎も角、彼の大佐が、遠田伯の娘に惚れて居ること、幸ひ彼奴
 を道具に、此方がたくむ手筈の段々、はやく仕上げて見たいものさ、何よして
 も定成が、生中學校育ちの書生肌、西事よ油斷の、あいが第一難儀、お前と斯う
 した、其中も、見て視ぬ振の、様子ゆゑ、おもはく通まよゆくは、必定焦ッて、マ
 を遣るよりも、マアゆツく、とど抜目、あく、静か、な、するが、好いちやア、あいか、そ
 ろやア、云ふまでも、あいな事だが、ヤレ、放埒の、不品行、どの、汚名を、着けて、族長の
 耳、も、入れて、置いたれど、運、好く、大佐が、遣れば、好し、左も、ない、ときは、情交、よ
 く、夫婦、暮ら、されて、敵、を見、すく、殖、やす、の、道理、これには、乃公も、閉口、だ、腕、拱
 きて、俯、視、けば、女は、傍へ、す、寄、ッて、何う、云ふ、寸法、か、知、ら、ない、が、大佐、の方、が

狂ッてもあんの小娘たい一人其處はわたしの寸法で旨く遣つて見せるか
らりうく仕上げを侈覽せよイヤそれは云ふまでも無い噺女は却ッて女
同士一義の邪魔よあらぬやうお前の工夫を借らねばあらぬ怨みつ笑ひつ
濃々とかたらふ此方の一と問ふ睡るが如く覺むるが如く白布を捲へる支
那皮製長布圍の上は安然として臥したる女兩眼は白き木綿切れを當てし
は縫帶あるべく頬より上頤にかけて幾重と赤くグルリくと巻きたるよ
顔のかたちも定かあらねど丸鬚の温和しやかかゝ纖弱と瘠せたる体の行義
好く折々胸は兩手を乗せては溜息吐きつゝ何か思案の様子あり。

第 五 回

般々として霜夜は冴ゆる増上寺の鐘十一時を報じ雲は消えゆく孤雁三聲
月靡ろあり只だ見る三輛の腕車砂を蹴ッて疾風の如く櫻田門を潜ッて正
門下へ出んとする時突然として門内より挽き出したる蠟塗の車兩夜あ

らぬと幌ふかく前面も見ず一目散と駈け来り「ヤ」と聲かくる間もあく先
は立ッたる腕車の轍はカッヤと觸れ込み撞とうしるゝ覆へず「アレッ」一
叫んで轉び出づるは後室と呼ばれし以前の女車夫は前後は驅より來ッて
口姦しく痛はり騒ぐ此方の車夫は倒れし車をかき起し面目あげ粗相を
詫ぶ三箇の車夫は拳を握り眼を怒らせ猛然として今や飛びかゝらんと競
ひかゝるを「お名が出ては悪うございますから今日は勘辨してお呉れ」從者
に立ッたる女の聲張り上げて止むる調子も氣遣はしげあり「エ、殿ち据え
ても遣る野郎悪休もくだい云いたきまゝ吐き散らして轍を上げて今一
と息を駆け出す車夫は匂いつくばいたるまゝ「サッ」と行衛を睨め居りしが
暫くして莞爾と打笑み幌の裡をのぞき見て「モ一大丈夫でございます危険
い仕事を遣ッて見たが逆好く思ふ國屋よあたり侈覽あるさいましどうく
巻き上げて遣りました」云ひつゝ法被の下は隠し持ッたる女持天鵝絨側の

革盤を出し悪い洒落をするやうだが斯うして置けば何卒の手藝も眩度あ
りませぬ、マアびく／＼と氣を揉まずと、私に任かしてお置きなさいませぬ、イヤ
手馴れぬ仕事をしましたので、何處も彼處も痛んで仕方がございませぬが
跡を嗅ぎ附けられちゃア大變でございませぬ、マ、ヨ一と息サア遣ッ附けま
せう。

第 六 回

八畳敷の一室燃ゆるが如く花の如き天鵝絨氈を敷き詰め黒く艶かある唐
木を用ひし六尺の床古法眼元信の三幅對を聯ねて窓よの古代錦も摸した
る西陣織の窓掛氈はしく海老茶色革布團のふつくりとせしを真中も置き
これより行義正しく端然として坐れる、遠田伯爵が夫人須磨子年紀の五十
路も近かるべく瘡形よして慈愛の相貌眉宇も溢れ物静か懐かしげある
有様なり、大形桐胴の火桶を距て夫人と對坐せる、令嬢梅子情々と沈み勝

ちある調子よ言葉も自然と打ちしめる、夫人の吸ひさしたる銀張の煙管バ
ツリとはたき、サア梅子何とか返辭をかしであいか、爾んも又黙ッて居て
分かりませぬ、約束の定めてあると云ふもの、お前マアお取極めが濟んだ
と云ふでござい、何んとでもあるとだから、耻かしいなぞと思はあいで早く
返辭を仕てお仕舞ひ、黙ッて居て、分りませぬ、エコレ梅子、優しく問へ
返辭はあし、夫人の更も坐を前め、何と阿母さんが云ひましても、返辭のあ
い、厭と云ふのか、殿、御撰みをするあつと、日頃の湯氣質からお父上の立
腹ささらぬものでもあし、四十前後で、大佐と云へば、餘り人にも遅れぬ出世
これから随分お登り遊ばすか、方をバ、良人と定めてお仕へ申し、優しう云ひ
れて暮らすのが、何より女子の身の仕合せ願ッたり叶ッたりと云ふ、湯縁を
不承どお前のお云ひの、松平さまへ、濟まぬと思ッてお出のか、爾うあら、爾
で父上から、体好くお謝絶を遊ばすから、少しも心配の要りませぬ、サア、何んと

ありとたつた一と言云つてお仕舞ひ「垂れたる顔さし覗き欺すが如く又聞
かくれど顔紅らめて俯視くのみ夫人は少しく聲を張り「これ程わたしの云
ふとがお前の耳には入りませぬか爾んなは剛情くおしのなら所詮母さん
では不可あいからモ一お父上よお願ひ申すより外は仕方ありませぬ」故
意と顔色作りて威嚇しかくれは「姫のあもはず両手をつぎ」アレ阿母アさま
爾んあよお憤満遊ばして、お詫の言葉がござりませぬ決して「意返し
の致しませぬゆゑ何うぞ御勘辨遊ばして」と云ふも涙のうるみ聲夫人は尙
ほもすぞ寄つて「ぢやアお前得心して沼田男爵夫人と云はれる氣かへ」姫は
涙よつまきて答も得せず「管の花の白薔薇吹く風あきよサマ〜ゆるゝも
哀れあゝまた黙つてお出のは矢張り厭と見えませぬのこれは阿母さんで
不可ませぬ、ドレお父上よ願ひませう」立んとすれば姫は周章て取すが「お
待ち遊ばして下さいまし、モン阿母アさま、爾んなら得心をおしませぬか」ハイ

姫は左あがら絶え入るばかり、涙々としてせぐと來る涙は雨の村時雨袖よ
傳ふを拂ひも得せず、袂よ顔を押しつゝ、み身を振はせて忍び音も啼く可憐
らしさ、流石よ夫人も堪へかねて臉を袖よおし拭ひ「オ、好く得心をしてお
呉れた、なんのわたしも一人の娘好いたとあれば其人は縁付けて、情交好く
暮すを見たいは山々芳紀と云ひ綺織と云ひ可愛相あはど遊つて居る彼の
男爵に添はせたいとは思ひませぬが、何うした譯かお父上が一徹短慮又仰
やるもの、あんどお諫のしようもなく斯う云ふ仕宜にあつたからは、これも
珍縁と諦めて泣き顔見せてお呉れでさい、ヨ、ヨ手をさし延べて姫の脊中を
撫擦する情よ、いもろき母親の涙ひまなく降り瀧ぐ、姫はやう〜にして涙
の顔をそつと上げ、最と耻かし氣ある口調よて「何處へ遣つて戴きたいなぞ
と、我儘いふではござりませぬが、松平子爵は才物とか當時有爲の青年とか
いろ〜お懇め遊ばして、お惣も行つたら彼アの斯うのと御教訓も仰や

三十一
 ヲ下さりながら何故このやうな事がありましたか阿母もし存じではござ
 りませぬか別な様子と云ふてお断り聞きませぬが、お身持も何うやら悪い
 といふお噂がお耳に入りかう云ふとにあつたものか、わたしも腑みん落ち
 ませぬ云はれて姫の前み出で、さんと噂ありまして、子爵よかぎって其
 やうな、お不品行のあいとい、ナヤンとわたくしがお知り申して居ります
 「サア爾うあうてゐるらぬ管されど、何時や本庄公爵から、珍意見お受けあ
 されたともあり、何うも怪しうおもはれます、これより意味のあるべきと、姫
 の外より誰知るものもあらざれど、流石それとも明しかね、其まゝ口を噤む
 れバ、夫人の一と、厨屋低く、それより子爵の此頃から折々飛鳥川家へお越しあ
 ざるより、お息女の桃代さまよ、お心あつてのことやら、爾うして見れば先方
 さまから、厭なお使ひも来ない中、綺麗にお謝絶をした方が、お前のためにも
 好からうかと、實の思つて居りますのさ、姫の愕然として驚けり、阿母アさま

飛鳥川の桃代さま、それの實説でござりまするか、他人の噂も聞きませぬのみ
 か、昨日も馬車も乗り合つて、目黒の寮へお越し遊ばしたと、沼田大佐が先刻
 のお断りしよもや嘘で、ありますまい、とらぬだ、お底しられぬ悲嘆の淵も沈
 める姫、見るく色青さめて土の如く、兩手を緊々地と膝も据へたるまゝ、頭
 うも垂れて死したる人を見る如し、夫人の少しく後悔あり、故意と氣輕も打
 笑ひ、ホ、他人の噂も聞き耳たて、詰まらぬ苦勞の仕ませぬもの、サ、お部
 屋へでもゆき、春を相手よお裁縫なりと何なりと、氣も叶ふたとをお仕が好
 ん、云ひつゝ、立んとするところへ、春の静かに入り來り、襖越しよ、恭しく手を
 支へ、只今松平子爵がお入來遊ばし、奥様や姫さまよ、お目にかゝつて行きた
 いとお座敷も、珍前さまと、お断り遊ばして、ございませぬ、夫人の眉を認め、
 思案顔氣遣はし、氣も姫を見返り、子爵がお入來あすつたさうだが、梅子お前
 へお目よかゝりますか、姫の冷やか、お頭を振れり、ア、爾うした方が好い、わ

たしは何んとかお謝絶を云ッて置きませうから」意外ある様子も春の太く驚けり」もし姫さま何う遊ばしましたか容さまの彼の願さままでございませう「イヤ今日の機嫌が悪いと云ひますゆゑ却ッてお目もじいたさぬ方が好らしい」夫人の衣服更めて出で行けり姫の依然として死せるが如し。

第七回

「サア子爵遠慮なくお初め下さい相替らすの手料理ぢや」ながく垂れて胸も達ッせる白粉と捻ッて食堂の正面に坐せる人いふまでもなく當時上流社會其名を知られし遠田伯爵續いて右手は須磨子夫人左手は一席の空位を除いて伯爵相對せるところ例の艶やか又爽快ある容貌を示して松平子爵これに益めり子爵の心もろよ禮を施し閣下のお話上手なところよッイ引かされまして毎度お世話ありがとうございます」イヤホンの有合せで氣の毒ぢや併し子爵なりの我々生立ちの頃との違ひ慶應義塾から兩校あたりで

當時の教育を受けられたから自然と生活の振合も分かり一汁五菜の粗食でも格別苦しうのござるまい」云ひつゝカラ〜と打笑ふイヤ夫人の前でございませうが一汁五菜の愚者と漂母が一飯糶と思ひ遣られました」交際術も長せる夫人の周旋も談話のいよく佳境に進めり子爵の体裁悪し氣も伯も問ふ「只今夫人は承はりましたか令嬢の何うかお加減の悪いと云ふお祈りか許し下さらばお見舞を申し上げたいと存じます」イヤたいしたとでもあいと云ひますが食事でもあつたら見舞ッて遣ッて下さいまし」夫人の訝かし氣も伯を見詰り伯の何んの悟れる様子もなしいそ〜として得意顔なる松平子爵の百味の珍羞あれども無きが如く早々も食事を了ッて伯爵夫婦も會釋なし春の導くまよも螺線形の段階をめぐッて西洋室の二階より上りぬお静かよお入來なさいませう」姫さまが何うしてお出遊はるか映驚りかさせ申しませう」子爵の笑ッて清に從へり奥よりたる十畳ばかり

三十四

その坐敷窓なごりなく明け放して錦の几張風も揺らめき蘭香も香遠くして
 烟かすかあり樟の扉静かに押せば音もせずしてサツと開くを疾しや遅し
 頭さし延べて窺ひ見らぬ萌黄色のテーブル掛を置ける四形の卓上七宝焼
 大花瓶も香も懐かしき黄菊白菊の大輪を選びて乱れ挿しよしたる後方の
 かた唐木製風琴もむかつて腰をかくと云ふも名のみ美しう櫛りたる舞
 踏銀杏を力あげよ盤上よ落し左手の指頭も雪より皓き額際を支えて黙然
 と考へ居るの梅子子爵のツト側よ寄り何ぞを爵いでか出遊はず「姫の我知ら
 ず瑠璃色の眼を上げてサツと見たり蒼く白き頬儘かよ紅を染めしが忽ち
 してまた死灰の如し子爵の失望せる調子よてか加減の悪いと云ふを嘶ひ
 先刻夫人から承はりましたが一休何う遊ばしたの」姫の何んの返辞もなし
 「頭痛でもなると云ふのでございませうか時候の替り時大切です」云ひつ
 近く進み出づれば「姫のいよく身を縮めて逃げんと蕩がくもの」如し

何時も似合はぬ姫の素振も子爵の太く驚けり惘然として四方を見まはし
 つゝ不圖うしろよ春の立てるよ心附き「醫者の何方よ診察を願ひか」と問
 へば「イエ何方も」と手短かよ云ふ「何方ももそれの宜しうございませう
 か出入りの方もありませんが近ごろ獨逸から歸朝いたしましたものがござい
 ます年若も似合はずたしかあ手腕だと申しますから早速わたくしから差
 し上げてよろしうございませう」言葉優しく云ひかかれ姫の一言の答も
 なく「険な涙堪え居る子爵の見るよ可憐しくすり寄り寄つて」それとも譯があり
 ますのかか包みあさらず爾か「と自分よか嘶しあさつて下さるまい
 か」脊撫さすれば姫の身を顔はせて立ちあがり「まことよ失禮でございませ
 うが情願あちらへか出遊ばして」云ふも涙のころゝ壁子爵の倒るゝばかり
 打落さ「ナ、あんど仰やるわたくしが側よ居ての貴嬢のお邪魔もありま
 すとか」ハイ「子爵の殆んど狂するばかり顔色消えて茫然たり姫の紅絹の半

巾口は噛み占め聲もらさじと泣き伏せしが、屹度こゝろを取定め「浮遊遊ばせ」ット身を起し止むる間もさく扉ひらきて出でゆきぬ。

第八回

擔の伊豫麻あかへ巻きて庭は打水の影清く野分は荒れたる芭蕉葉のサヲく取くも哀はれあり六疊の小座敷は草むしろの寐を、ろ好く脚跡み延ばして臥したるの中島強一郡内編の葉美やかあるは白地浴衣の新らしきを重ねて同じ色の縮緬幾重ともなく巻き下げたり三十あまりと見たる按摩の筋骨達しげあるは腰骨揉ませて最と應揚に構へたるが、苦り切つたる目元サロリと見遣つて「コレ完悦筋骨達者よ而かも三十面の大男が兩眼もって居あがら上下揉んで三百文といふあんまり頼馬を譯じやアないか」按摩は詫ふるが如く丁寧「イエお耻かしい次第でござりますすが何を申しませよも田舎ものゝとでいあり何うして」腕一本でい喰はれぬ世の中、ハ

ろく考へても見ましたあれを雀に鷹の能はあく斯うして流して歩きま

すよも何處よお華主さまのあるではあるし、こんち心細いことはござりませぬ「ナニ腕一本では喰はれぬ世だ、爾う云ふ愚味の奴だから何時まで過つても旨い仕事のあい譯だ、コレ乃公を見ろ大ききとを云ふやうだが大小名の胤は産まれた譯ではあし腕一本腰一本で仕上げた身分はこんちものさ、先人間は並一と通りの智慧があつて、それで正統は渡つて行けば、おんの怖いものはあし等だ」按摩は膝を前めて「大小名を仰やれば此處のお邸はたしか東國邊の名高い殿さま當麻侯と承りましたが、大層殿さまのお天器が好く、お若いよは似ずお學問あらお氣質なら何處は御批難もないとの噂と云ふのもお側よお附き申してお出なさるゝ旦那さま方の、お育がらが好い故だ、世間の評判でございます」ハ、ア宗悦めもう胡麻を擦りやアが、餘計なとを云はずと油を取らずに切々と遣れ「イエ何ういたしまして何

んの傍申戯を麻胡をさぞ、爾んとは決して私よやアございませぬ時よ
 旦那さま異をとをお尋ね申すやうではございませぬが、此方のお邸の後室さ
 まお修の方と仰やいますのは、以前何方よお出ささいました「間はれて軍藏
 肩を察め、何方よお出遊ばした、イヤ稀有なとを云ふ奴め、先殿在世のむか
 し、お寢間のお伽よお召抱へ遊ばしたるお腰元と當彦代のためよ、繼母を
 がら正しく彦母公、あんの不思議があるものか」イエ、それ存じて居ます
 が、わたくしのお伺ひ申しますの、はずと以前の素生のとでございませぬ
 「エ、くどいとを聞く奴ぢや、お生れ、同じ家中よ、お物頭を勤めて、三百石の
 彦知行受けし岸山右衛門が手鹽よかけて育てし娘ぢや、モシ旦那さま、其とは
 好く存じて居ます、たしか彦殿へお上りあされた、二十七八、水の出花
 の若盛里、何處でお暮しなされたか、旦那貴郎は彦存じてございませぬが
 「エ、隠して包めると、じやアあし、お断しあす、下さいませ」様子あまげあ

言葉の端々、軍藏故意と素知らぬ顔、エ、何處まで五月蠅く申すの、じや、わか
 しのとの存せぬが、それをまた根ぶかく尋ねて何うするのだ、イエ、何うの斯
 うのと云ふ譯で、ございませぬが、大層仇あか方と云ふと故、ツイお伺ひ申
 じました「云ひつゝ、四方を見まはして膝を進めて、壁低く、モシ旦那さま、強一
 さま、旨く遣ッて居るさいませぬ、何うしたと、」ヘンとぼけちやア不可ませぬ
 「短けへ浮世、細長く、正直正路よ暮せと、お前さん、何處を隠しやア出る盛
 詞だ、隠居が死亡り當代の、また若へのを當込んで、巧んだ仕事のマンが好く
 什器財宝金銀の出入り、素よりツヤ、と、油の乗った後室が、誰よ手向の
 切髪も、マメ白檀香の香よ染まぬ、四十九日の追善、腕よ彫らせた、一心、命、ヤ
 ツ、旨めへ汗を、汲ひながら、魚をも喰べぬ、阿彌陀願、モシ旦那、あんまり虫が
 好過ぎませうぜ、云はれて強一、おもはず、踏と飛び上り、言葉押へて、前後見ま
 はし、息吐きて、顔色作り、ヤア無禮至極の、今の一、言、兩刀、帯する、むかしあ

ら、汝斬ッても捨てる奴、二言とこゝよ申して見よ、其まゝ此場は立たせぬぞ」
 聲荒々しく罵るを、按摩は聞いて打笑ひ、「コレサ旦那、何よも爾んぢやムキよ
 なッて憤らずと好いぢやアございませんか、これが根も葉もあいとを云ふ
 でのあし、打てば響く其方の胸も、覺へ緊々地とある筈だ、爾んぢや怖へ顔をし
 て、仁王の向ふを張んぢやアすッても、誰が何んども思ふものか、ぬ汝まだく申
 すか」憤然として腕を巻り、勢ひ飛鳥の如く相手の胸倉むんずと取るを、彼方
 も去るもの、矢庭よ五体かためてしッかど坐り、「一流極めたお腕前、噂も聞い
 て居りやしたが、情お見事さ、何んの動する様子もあし、意外の伎倆に強一密
 かよ舌を巻き取る手を拂ッて、以前の褥へ静かに坐り、「イヤ驚き入ッたる腕
 前、爾うとも知らず強一が慮外死してくれ」後方の手文庫より紙幣一と束を
 取り出し、「これハ甚だ些少ぢやが、無禮のお詫びだ、柔順よ納めて呉れまいか」
 以前よ變た言葉の優しさ、此方も即座よ打解けて、「イヤ爾うお平よ仰やられ

て、按摩風情のわたくしが、何んどもお詫びも申されませぬ、まかし旦那さま
 此お金の頂戴ハ出来ませぬ」コレサ、出来るも出来ぬもあいでのあい、か高が
 紙幣で五十圓体の邪魔もあるまいから、ホンノ療治代だと心得て、器用に
 納めて呉れるが好い、「イエ、何んぞ仰やッても、此お金の頂戴ハ出来ませぬ、療
 治代ならそれ相應、八錢ばかり遣ッてお呉んぢやいまいし、これも毎度のお華
 主さま、何時もの通りお月拂ひ願ひます、ハテ、お前も執念おかいと云ふも
 のだ、これ程乃公が云ふと故、柔順よ納めて呉れて、何うだ、あんの無禮と仰
 やいます、が、素ハわたくしの云ひ過ぎ、それよ大枚五十圓と云ふ此お金ハ「サ
 ア、魚心あれば水も、ろぢや、奇麗よ流して今日の一義を忘れて仕舞へと仰
 やるのか」見ぬ世のむかしと何事も、素知らぬ顔願ひたい、「イヤ、其事あらバ
 お謝絶だ、エッ」棚の遠慮ぢやあるまいし、上げたり下げたり巫山戯た真似を
 しよさんぢや、爾んぢや何うでも其方が知ッたか、振よ、噤舌ると云ふの

か「知れたとだ」エッ」と、爾う手短かよぶちまけりやア色も飽もございませ
んが按摩稼業にして居ても、戀と慾との二た道もやア人相應よ未憐の残ッ
た吉田宗悦五十圓じやア不足でござる」一と癖あるべき面魂強一さずがよ
困じ入り「それじやア宗悦どの何うして呉れと云ひなさるのだ」見かけつけ
ちる野郎でも悪事又抜目あるい乃公だ、恰度先月薄月の影もおぼろな櫻田
見附宵から狙った椋鳥の羽交してしっぽりと濡れた夢路も機嫌よく三盛
揃えた初ッ鼻の腕車を目がけてガツンリと轍へ當てたこの乃公だ其時
拾った革盤の裡も怖い鬼のあいかのやうな名前を記した二通のみ他人よ
も見せずしつかりと斯うして懐中して居るのも何時か出逢つてクンマ
リと儲仕事の歩み入って生涯樂々暮したさ五十や百の目腐れ金何んで往
生が出来るものかね」云ひつゝ懐中探つて投げ出す手紙を忙はしく拾つて
見れば、疑ひもなき自筆の濃々と簡ひ交せし覺の密書これいとはばかり色青

覺めて強一兎かくの言葉をしサア旦那黙つて居ちやア分らねへ當麻の家
を横領して我意を振りたい野心のあるお前さんにやア好い相手だ云はぬ
と云つたら金輪際首が舍利よあつても云はねへから」一と口乗せて相應の
役を附けてお呉んさせへまし愚圖くするのは乃公ア厭ひだ。

第 九 回

「貴女、マッ其縫帯と頭巾をお取りあさいまし、あんぼ晝日中だと云つて此處
へ氣の注ぐものはござへません、イエ用心も用心をしなくつちやアあら
あいが生中斯う云ふ場所だから、滅多に見咎められもしますまい」何んの氣
が注ぐものぢやアございません、曖昧な稼業を爲るだけ、嫁女も粹を通し
て坐敷を避け、手でも拍かあくつちやアお前さん、碌又返事もしやアしませ
ん」成程こそや爾うあざさうあもの、爾んちら餘ほど醜陶しいから頭巾だけ
は脱りませう」爾うあざさうあまじ、あんぼ秋でもマッ頭巾もやア暑うございませ

四十四

す「忍が丘よ錦と争ふ樹々の相を正面に見渡す月下亭の奥座敷紙障かたく締め切つて密々と語るの遠田家の小間遣ひお春と吉田宗悦と名乗りし以前前の男銚子盃の用意形ばかりよの据へたれど指頭觸れたる様子もあしお清は頭巾を脱つて側へ置き「孝助今更云ふではあいがお前よまで斯んお難儀をさせると云ふのも全然彼の強一めが所業から折角東京へ踏み出して立派を出世もしよう」と云ふものが斯んなかゝり合ふ身を縛られ刑法上の罪人とも云はれるやうな真似をさしたと怖ろしい巧の畏れ入つたりして「サツ詰まらぬとだと思ひだらうね」「イエ飛んだとを仰やつて下さいます祖父の代から浮恩もあつた貴女のお家世が代でもござりませうからお草履どつてお伴をいたす此孝助さんで自分の身を考へ兎や角思ふやうなことがございませうそれよ貴女さまのお主筋に當ります殿さまあらわたくしの爲めよも浮主人さまでございませう高が下人の生命ひとつ捨たと思

四十五

へバ何んの怖いとも恐ろしいともございません「イヤ爾んお死ぬの何んのだ今この世もあるべき筈の決してないとそれを心配はしませぬが女だてらよ生意氣過ぎたと人の思ふのも構はずよわたしが斯うした望みを起したばツかりお前までが斯なよ苦勞をするかと思へバ何うも氣の毒でありませぬ云はれて男の恥度なり爾う貴女のやうな氣の毒だ氣の毒だと仰つてはわたくしが窮屈でありませんこれが學問智識人相應よ出來ても居りなすれバ「サア貴女さまのお片腕もありませんが何を云ふよも田舎で育つた此わたくし益ござ勝負の喧嘩から相手の頭を叩き割つた位より外よ取得のあい体所詮駄目だと思ひおさるも浮道理でございませうが彼れ見ろ孝助も彼様な奴ぢやアあと思つたよ剛氣い手柄をしたぢやアあいか人の見かけよよらぬものだと田舎のものよも評判され去年三月節句の晩にわたくしの身持を案じよ案じて病死んだ草葉の影の阿母にも安心させて

遣りたいと及ばずおがら一生懸命あつて居るところでございませう
 承もありませんが、何卒お役も立て下さいますし、と眞實籠めて掻き口説け
 か清も太く感じ入り「ホンニ何時もあがら前前の志より、わたしも實も感心
 いたします、爾う云ふ確乎とした了簡あら、わたしの助ばかりか、殿さまのお
 力もあると云ふもの、随分しツかりと頼みます、うへ、もう其とあら決し
 てお氣遣ひをされませう、先日鳥渡を嘲し申しました通り、按摩あつて櫻
 田透を、毎日毎夜梳して歩きます中、首尾好くお邸へ呼び込まれ何處へ行く
 のかと飛び立つやうと思ひまして、女中も着て参りますと、お噂も聞いた太
 田軍藏でございませう、イヤ其時の嬉しさかのれ人非人めと、向ふ脛も喰ひ附
 いて遣りたいやうにも存じましたが、イヤ、此處が貴女の仰やつたこと
 ろど、實と辛抱いたしまして段々様子を探つて見ると、お邸の女中の素より
 お出入りの町人までが、それは、大事にかけてヤレ中島さまソレ、伊家老

さまで聞き惜いほどの追従、輕薄それ引かへ殿さま、一から十まで中島
 が差圖、サツは無念でございませうと、腹の中での泣いてばかり居ま
 たが、櫻田見附で首尾好く奪ひ取つた革盤のともございませうし、最う好い時
 分と敷から移し後室さまのとを云ひ出しますと、流石の中島も、嘆息してと
 う、面を脱いた上、一味あつて呉れるやうと、此方の思ふ壺も、箱ツたの
 の、恰好幸ひでございませう、思ひの外の上首尾と云ふと、お前の手紙で見
 ましたが、何んよしても彼の強一が困ると云ふのは、急所を壓えられた故で
 もあらうが、お前の遣り口の旨いのだ、わたしは感心して居ます、イヤ彼ん
 とあら年来遣つて居ります故、朝飯前でございませうが、彼の邸の中、養はれ
 る身とありましては、これから滅多に油断も出来ませぬ、此方で思ふ程でも
 なからうが、先方も氣休めをさせるまでは、お前も油断があらさうよ、イヤ伊
 家老、心配より及びませぬ、其處は私も如才なく、屹度立ちまはつてお目よかけま

す「言葉奇麗よ云ひ放ち霞時無言も居たりしが不圖氣附きたる様子にて「モ
 シお春さま願と忘れて居りましたが貴女御用を仰やるの何のとでござ
 います」ア、お前を呼びよ上げたの、別のとでもおいかねく、嘶したか
 姫さまが彼れ程惚れ合ッてお出遊ばしおがら俄かよ様子の變つたの、
 何うした譯かと段々お尋ね申して見れば、お父上が張ッて沼田大佐へ行け
 と仰やるどか、それの松平の殿さまが飛鳥川の桃代さまと、何うの斯うのと
 あられもあい影口聞いて泣いてはッかりお出の、必定沼田の指金と、わた
 しの見込みを附けましたお、御精細と云ひお氣質と云ひ當時二とあいか
 姫さま思ひ合ッてお出遊ばすこそ願ッてもあいか仕合せ何うともして
 一所におさせ申したことをあらば、影日向は心配はして見ても、何うも休好
 く行かぬゆゑ、それで相談をしますのさ、情々として罷れば孝助小膝をハ
 と拍ち、イヤ其とあらば私より申し上げたいと存じて居りました、何時やら

の晩でございしましたが、月光の見事よ、浴へて居りますので、お庭の掃除をい
 たさうと、箒を持って奥庭先を歩いて居りますと、人氣もあい客廳に誰やら
 嘶しの聲が聞こえます、故不思議なと、裏手へ廻り、尾花の影も隠れんで様
 子を伺ひますと、一人の例の強一で相手は聲も覺えのある後室さまが連り
 又話をなされするが、何やら小聲で分りませぬゆゑ、ワキ／＼いたして居
 ります中、それぢやア遠田の娘、いよ／＼寸法通り行ッたのかと、斯う後室
 が仰やいますと、ナアニ彼んなと、行かぬもありやアし、あいが、只だ
 心配なア馬鹿殿が無理な我意でも通した日、やア鳥渡事が難義しいが、ナ
 ニこれも袖の下の伴内もどきて何うともあるから安心さ、詰るところは不
 平よ不平を重ねさせて狂者よでもするが上分別と、貴女、わたくしが聞いて
 居ることも心附かず、ツカ／＼、噁舌ッて仕舞ひました、が肉を喰ッても足りあ
 い奴、わたくしは様の下、下、躑躅んだま、業を衰やして居りました「箇程な巧

あらんとは流石のか春も心附かねば意外のことに呆れ果て慄然とせしま
 言葉もし孝助尙も意氣込みて「たしか沼田の手許から遠田伯へ毒のま
 はったと違ひはあしこゝは一番貴女さまが何んどかして添はせてお上げ
 なさらずに殿さまがお可愛さうでございませう立派な身分よお生れあす
 ッて生涯奥さまも持てぬと云ふ情をい目よお逢ひあされうも知れませぬ
 モンお春さま何んどかしてお上げあさいまし」顔さしのづいて勤むればお
 春の思案の眼を開き仇野さまをはじめとして、お歴々の御縁者澤山おあり
 あさいませれどこれとお構ひあさるゝ様子はおく御家中一統祿を食ん
 だ御方まで見て見ぬ振の昨日今日所詮女子のわたし等でお何んと工夫も
 出ませぬが人の黒晋も構はずに斯う乗り出した上からは何うとかせずば
 あらぬと、ハテ好い工夫は無いのか「再び思案よ沈みしが暫くして顔を上
 げ」孝助天長節の夜會よは多分殿さまもお越しなされうが此ごろお馬車の

お伴よの誰と極ッて居りますへ「取者は中島の指金で天然痘の仙太と云ふ
 腹黒な奴でございませうが別當は若衆の三次と云ひまして柔順な男でござ
 います」この三次とやら云ふ男も頼みお前が代ッてゆくと云ふ譯はなる
 まいか「左様さこれの随分難儀でございませう、ママ大田めが安心しては居ま
 せぬゆゑ滅多なとも云はれませぬが、シテ貴女何うするか積りでございま
 す」イヤそれはママ何んとも分からぬが、爾うでもおさればど、ツイ考へたと
 がありますのさ「合點ゆかねど何か思案のあるべきとぞ孝助と、ろよ打首
 肯き」わたくしが出るぞ云ふ譯は行きませうまいが、日常から仲の好い三次
 のとでございませうもの大体おとは遣ッて呉れやせう」と云へどお春は頭を
 振り「イエー」それが飛んだ間違ひの原因と云ふもの滅多な他人よは云は
 れませぬ」それでは貴女何んお御用でございませう、サアわたしの思ッて居る
 とは「云ひつゝ四方よ目を配り管扱いて火鉢の灰よ何やらサラ〜と書く

を孝助瞬きもせず實と見て「爾んち千太を」酒で痛めて呉れさへすれば、後
はわたしの考で、何うとか仕様はある積り「イニ爾んちとちろ心酒は要り
ませんか手筈させて見せませう」さだめて如才はあるまいが、決して餘人よ
知られぬやう「ナアニ貴女、吉田宗悦と異名を冠った男でございます滅多
油断はいたしません。

第 十 回

マーナルも彫める十二美人の額椽花の如く、洋々として春泉を欺く大玻璃
鏡の前に、端然として立てる令嬢梅子、今しも嬌粧全くとって寒玉の腐いよ
く滑かみ、羅綺も堪えざる柳の腰ますく、瘡せて糸の如し、後方よ立って
ッッッくと見惚れ居たるお春は、ツと前みて笑みつゝ「なまをお召し遊ばし
てもマア能くお似合おされますと、水色絹の洋洋服よ、白のペールをお懸け
遊ばし、装を取ってお歩き遊ばすか後姿、ホンニすんざりとして、お立派者と

とお見惚れ申して居ました、が、また斯う白襟も洋紋服で、チヤンとお髪を
お作を遊ばした、娵容子は、格段のやうに存じられます「姫のうしろを見返り
おがら爾んちも挑發ッとお呉れでもい、何んだか氣分の悪いので、何うも思
ふやうよ、お化粧も出来ぬわチ「イ、エ何うして貴女、立派よお出来遊ば
しましたこれで、一所よお出なさる、沼田さまのお悦びが實と思ひ遣
られます「云ひつゝ、故意と打笑へば、姫の少しく不興氣よ「アレまた爾んち悪
口を云ひますと、今日の夜會の止めますや「モシ姫さま飛んだとを仰しや
いませ、何よも貴女が何うのと申した譯でございませぬ、沼田さまがお年
齡よもお耻おさらす、彼のやうよ、慕ッてお出なさる、すもの、爾うか嫌ひ遊
ばしては實に彼のお方がお可愛相でございます、わたくしあら、何んさよ
嬉しいか知れませぬ「眞面目に云へば、姫はホ、と打笑ひ「それでは、清か前彼
の方のところへ行ッておあげさ、わたしがお媒妁をして遣りませう「雪より

白き襟もとよ」と筋乱るゝ髪の後れ毛ソと掻きあぐる美しき、お春は今更
 のやうに見惚れ居りしが不圖こゝろ注きたる様子にて「それは爾うと姫さ
 ま、貴女いよく松平さまへお出遊ばすあら、能く決心を遊ばさまいと不
 可ません阿母アさまは兎も角も、お父上の殿方のごではござりするし、是
 非とも沼田へ遣りたいと、彼のやうに仰しやッてございますもの、一と通
 りや二た通りで、御承知遊ばす等はございませぬが、それでも貴女の松平さ
 まへ行きたいと覺し召すか」問はれて姫は耻かしげよ「お父上や阿母アさま
 の、お許しもないよ遊葉あとは好みませぬが、お屈濟よもあッて居るとか云
 ひ、殊よは御約束までしましたもの、今とあッて何うも變改は濟まさいわ
 ねへ」お春の側へすり寄ッて「サア其とでござります、何よも姫さまをお誘ひ
 申し、お父上や阿母さままで御心配をお爲せ申したうはござりませぬが、
 これが御縁邊もあ、赤の他人と云ふではあし、何方かと申せば何時ものお

優しいよ似ず、お父上さまの御一徹がお恨めしい位ももの何れ後より飛鳥
 川の殿さまよでも、お説を遊ばしてお賞ひ申せば、それでも斯うとは仰じや
 りますまい、サア皆さまが徒ものとか笑ひあさるであらうけれど、實を斯う
 して居ましては、大佐のところへ行かねばあらぬが、あみじみ悲しく、一旦阿
 母アさまへはお請をいたしました、サア先方へ確乎と御返辭のあいが責めて
 もの仕合せ、これから一倍そあたの世話にありませすや、サア勿体ない、何ん
 のか世話申すは當然、其やうな御斟酌は要りませぬ、それよ當座さまの御様
 子も聞けば、聞か程か可愛相であらぬゆゑ、女子あがらよ出来ませすだけはお
 力もなッて上げた、いと、わたしは思ッて居ますの「爾うしてか上げあされ
 ますれば、何んあよ殿さまもか力強く覺召しませう、斯様あを考へて見ま
 すると、先日殿さまよ御不愛相をおされました、が實にお氣の毒でなりませ
 ぬ、姫は氣耻かし氣よ顔を紅らめ、サアそれを又云ッてお呉れであ、沼田大

五十六
佐へ何うでも行かねばならぬと聞き、氣が有哉無哉と乱れて居ました彼の
時、今から考へ見ましても、何故彼様であつたらうかと、自分ながら怪
しう思はれますワ」お清の故意と打笑ひ「ソリやお心のお乱れ遊ばすも、伊道
理でござります、飛鳥川の桃代さまとお聞き遊ばし、ムラ〜とお取詰り遊
ばしましたもの、彼の位はお焼き遊ばすの當然でござります」姫の顔も然ゆ
るが如く「イ、エ何んとお前が云ひましても、桃代さまのとなを、何んとも
思ッては居りませぬ、お清はいよ〜打笑ひ「ホ、ホ、爾んなもお思ひ遊ば
さぬが能ではござりませぬ、澤山焼いてお上げ遊ばしませ、餘まりお柔順し
くしてお出遊ばしては、服さまが何んかに横着を遊ばすか知れませぬ」ア
もう其とは勘忍してお呉れ、服がたのお噂もどをもし、阿母さまでも聞て
えては、何んかにお叱り遊ばすか知れませぬ」ホンニこれは春が粗相でござ
りました、が、もし姫さま「聲を低めてそつと云ふ」先刻からも申し上げます通

り、大佐のお誘ひあされるを、好い機會にお越し遊ばすと故、あちらの様子を
悟られぬやう、萬事はわたくしが爲るまゝ、屹度なさらねば不可ませぬ、其
とは能うく呑み込んで居ります、が、跡でお父上や阿母アさまが、サツ吹遊
ばさうと、それが今から氣にあつて何うも足が進みませぬ、打消れたる様子
惘然と思ひあがらも故意とお春は氣輕げよ、アレ又しても、其様を仔細も
う〜非切とお考へ遊ばす直ぐも後からわたくしが、屹度伊安心と遊ば
すやう、お取計ひをいたします」尙ほも頼りと、叩く折から、輪々砂を蹴つて、駈
け来る馬車の門前近く、聞ゆるに、お春はもしやと窓より、眞紅の純帳かき
分けあがら、障子越しに外の方一と目見て、アレ〜姫さま、伊覽遊ばせ、お待
かねの陸軍大佐沼田男爵さまが、大層お装粧でお出あさいました、お早く伊
覽遊ばせ、アレサお早くと申します、故意と騒ぎ立つれど、姫は立つべき様
子もなく、眉を翳めて、太と冷やかに笑みたるのみ。

倏ちよして絃歌囀亮湧くが如く、忽ちよして歡聲轟々堂を壓するもの、時の外務大臣が例よよつて鹿鳴館に開けるの夜會この夜賓客三千人半の夫人令嬢と聞こえ、燦々として胸間も勳章の美々しさを示せる軍人あれば、洒々たる燕尾服ゆるく垂れて、今様の諸帽子の流行を誇れる紳士あり、紅きもの、花の如く、白きもの、雲の如し、紅紫燦爛霞と乱る、喫煙室の一隅、据へたる安樂椅子よ身をもたせ、睡むるが如く、悠然として眼を杜ぢたる、當麻子爵例の爽快ある面色全く消へて、太く失望せる様子あり、折々思ひ出したるが如く、眼を見開きては、ホッと太息吐きたる後、また以前の如く、杜ぢて自動きもせず居たりしが、高聲よ何か笑ひ興じつ、廊下を通れる人聲、不圖耳よ入ると一齊しく岸破と身を躍らして、戸口よ出で、二た歩三歩ツカ、と後を追ふて廣庭先よ出んとする折、何心なく見返したる、沼田大佐

左も誇り顔よ梅子の手を引いて芝生よ出んと、段橋を降りかゝり、つゝ子爵を認め、何か云ふんとして、姫を見、また急よ思ひ出したるが如く、脚早よ急ぎ立ッて廣庭へ行きぬ、憤然として飛びかゝらんば、かゝる子爵の、忽ちよしてまた死せるが如く、顔色蒼白と變じ、唇頻りよ戰かせつ、茫然として、姫と大佐の跡を瞻め居ししが、今の心意も勞れ果てや、悄悄として表の方に歩み出で、夥しき車馬の間を彼れかこれかと自から求めてやう／＼と探し當て、駁者や居る別當や居ぬかど見まはせど、四下に影も覗えざれば、頻りよ心焦燥ちつゝ、荒々しく戸を開け放して、裡よ入れば、誰やら坐したる影の見ゆ、子爵の不審と聲をかけ、仙太か三次か、其處よ居るの、誰れ、問はれて、此方へ進み寄る、伊前さま春でございませす、子爵は差し入る燈花よすかし見エム、其方や春か、何うして此處へは遁入ッて居ッた、イエ、其譯の跡でとツク、と申し上げます、先づお遁入し遊ばせ、只今直ぐと姫さまがお出遊ばします、人の目

襖よかゝらぬ中サ、お早く「子爵は夢の心地さがるも云はるゝまゝ」又ツ
 と入る時お春は再び表を見遣り「アレ〜姫さまがお出遊ばした彦前其方
 へ少しお詰め遊ばして」子爵はいよ〜感へる様子「サア姫さまお早く此方
 へお遣入り遊ばせ、アレサ爾んな愚圖〜してお出遊ばしては男爵さま
 目附かります」手を取って引き入れたるは疑ひもあき梅子物をも得云は
 ず子爵の顔を瞻めて目禮せしのみ、此方も極り悪氣、禮を返して、事の次第
 を清く問はんとする折、誰と知らず戸口細目、開きて何やらバツリと中
 へ投げ入れ、其まゝ木間がくれ姿を失せぬ、子爵はいよ〜訝かしく足下
 へ落散る件の一物、左手へ拾って燈花を透かせば、手蹟は覺の遠田伯爵、梅子
 どのへ光成より「不思議の一通即座、姫の手へ渡し」文字も能くハ讀めます
 まいが、何う云ふとか燈花をたより、早く讀んで彦前あさいましお清も不
 審と頭を鳩め、封押し切つて讀み下す

假初の約束とは申しながら、修身の本夫と思はせ置き、いも松平子爵を、
 謂はれなくして、思ひ嫌らひいと光成一期の不覺、今更面目もあき次第
 にい、素より予等も彦身の父、又ていもの、何とて獨り男爵を望みいべき、
 只だ奈何とも致しがたきは、彦身の慕はれし子爵家の状態、甚だ穩かあ
 らざる様子、よこれあり、押して予等家と縁組いたされいはん、よは彦身
 の不幸のみ、よはこれなく、子爵彦身上も、禍を早められい彦こと、予
 等老眼、観察いたし、い、身性とは存じながら、も狂げて沼田家へ、婚
 儀をすゝめ、やし、い、次第、い、然るところ、今夕化粧室、よ於て、濃々と、秘語
 やかれい、一、一、罪深き業とは心得、あがら、闖越し、承はり、艱難辛苦
 を俱、す、べきは、云、ふ、ま、でも、あ、く、一旦、本夫と定められ、い、外、よは、婚、縁、も
 いたすまじ、どの決心、感じ入り、い、就ては、向後、一命、よかけ、ても、子爵の片
 腕、とも、あ、らせ、らる、べく、又、予等、許し、置き、い、とは、申し、ながら、駈、落ち、い

六十二
たしひやうに云はせしとの口惜しく故意と身身は添ふて此處へは参り態と一通さし入れし夫婦と申すものゝ間には實意の外何もなきやう覺し召されたく老の縁言ふ申し進めし春と多年召し使ひ律義も優しき氣前感じ入りし幾久しくか目かけられ然るべく存じし以上

梅子どの

光成

「浮前何んぞお心得あつて斯様おとを遊ばします」威儀を作つて膝すり寄するの中島強一満面怒氣を含んで服は血鮮を濺ぐが如く子爵は落着き擲つて他事もなく「強一其方や何と聞て喧ましく申しよ参つた」強一ズツと坐を前み「コリヤ浮前よ何の浮乱心と見えまするを」何んと申す強一「今一言云つて見よ」イヤこれは又改まつたか言葉浮前よは浮乱心と見へます云はれて子爵ハ勃然と立ち「コリヤ強一何故子が乱心ぢや乱心とは氣違ひと云ふ

も同じと強一とは何が強一ぢや「評氣次第は屬しく顔色變るを強一更も物ともせず」先づソツソツと遊ばさずとどつきり考へても浮遊遊ばせ何處の國もか一城の太守の後胤とも云はれるものが拾ひものをしたやうと奥さま迎へるものがありませうや「云はせも果す梅を込らせ」コリヤ乱心と申したは其とかイヤ手前も實に分からぬ奴ぢや仇野侯をはじめ親戚がたの浮同意をも得既よ浮聞濟みよまであつたる婚禮其方など異論のあるべき筈はありイヤ左様よは参りますまい何故と仰しやい浮親族がたへ浮相談のありしは以前のと其時異儀のありものあら疾うに浮婚禮はありし筈今日まで延してありますのは即ち約束變改の好い証據よござります「子爵は思はず吹き出し」句を馬鹿おとを申すお上へは素よと當の相手の遠田家へも何んの浮挨拶もせぬものが何うして破談の証據よあらうや縦し何れもいたしたところが汝等如きの差國は受けぬ家令執事の分際として出過ぎ

六十四
 た一言無禮であるが「儼然として叱を附くれば、軍藏殿を張上げて」イヤ
 う何んぞ我慢をお通しあされても、此縁組は軍藏飽く迄不承でござる、屹度
 か邪魔をして見せませう「子爵は故意を落着きて」ユリヤ強一何故其方は左
 様よむづかしく申すのぢや、子と其方との間ではあいか、他人がましく申さ
 ずとも静かに嘸をするが好いソ「下手よ出れば軍藏いよく附け上と」身分
 ん餘つた出過ぎたこと、只今仰しやいしましたが、伊前其口、汝お忘れ遊ばす
 勞者無人の一言よ流石子爵も堪へ兼ね、強一が右の腕先をツて引き起し「コ
 リヤ強一イヤサ人非人の中嶋強一父祖三代の恩を思おもはず、主人たる
 手にむかつて重々の悪口、世が代あらば汝其まゝの宥さぬ奴、今日より暇
 を遣はず、一刻も猶豫は罷とあらぬ、サア立て立て、立たぬと汝目も物見
 せるぞ」力よ任せて引き立つるを、軍藏拂ッてきつかど坐と、其處が伊乱心で
 ございます、如何も伊當主は伊前に遠ひござませぬが、中嶋強一伊亂心

六十五
 は少と伊出過かど存じます、ヤア蛆虫同然の身を持って返すくも無禮の
 雜言憎つくき奴め、強一が襟際をツて引き出さんとひしめくを、爾うのさせ
 じと互よ争ふ其ところへ、家従大崎兎入側口より駈け來り、子爵の袂よすが
 ツて宥めつゝ、此方にむかつて聲荒く強一をの、伊前でござるぞ、お控えなさ
 れ、ヤア大崎をの、何を知られたとで、あし、其處を退き下され、怪しからぬ
 伊前の仰せ、此ま、黙ッて下ッては、松平伊一家の伊運命をも預る拙者、以後
 の示しが立ちませぬ、ヤア云はして置け、バ慮外極まる、汝が悪体、大崎人であ
 しめの手足を取ッて門外へ毆き出せ、エ、きりくゝと手傳ひ居らぬか、言葉
 劇しく云ひ罵るを、大崎の雲時と押し止め、伊前まづくお静まり遊ばしま
 せ、強一の過言の進てお説びをいたさせますが、先刻より伊母公さまが、か次
 のお間よか越し遊ばし、何かの様子をお聞き遊ばして、ござります、ナニ母
 上がお越しどか、儼然ぬ言葉よ子爵は愕然と驚きながら、家來を相手に云ひ

馬りたるとの端なく面目あげ坐に還へれば左もあるべしと強一笑ッて
差し控ゆ金地の襖スラリと左右に開かせて静々とするの後室お修の方子
爵へ見るより坐を退き母上夜中を云ひサツか目障りよござりませう我あ
がら端なきとよの存じました何が申すも彼の強一自分の年若あるを
侮りましてか雑言過言を吐き散らし刺へ手むかひいたす不埒を奴早速暇
を遣はさうと只今引き立て居るところでござります後室は片頬も少し笑
を見せ譯は只今彼所で聞きましたが何う云ふ粗相があるもせよ假にも
主人と敬ふ方よ口答へをする強一の不策何うしたものそれ又親族藩士
協議の上にて取定めたる家令の役前如何よ家督の身身分でも自儘も放逐
しようとはお前でもあい粗相おと殊もはわたしと云ふものもありません
よ相談ひとつあさらぬは女と見ての卑視かたしはか腹の違つた伊達忠
かマア何方にしても少々と心が分かりますね云はれて子爵は頭を下げ恐

れ多い其お恨みおんの伊達忠なきをいたしませう等はござりませぬが餘
りと申せば無禮の口振思はず知らず我慢の臍を切りましてツイお伺ひも
申しませず面目次第もござりませぬイヤ爾う謝る程のとてもあいが兎角
主従の仲たがひ他人目よ立ってなりませぬそれ強一お前も好い分別の
年齢をして爾う一徹も云はぬもの少々と言葉も附け能く得心の
行くやうよ異見をせねばありませぬ先殿お没れ遊ばしてより男こと云ッ
て其方の外も誰ぞと頼むものもあく何か附けて心細い今日この頃も
し主従の間よ不和おとでもありましていどわたしの案じて寐られませぬ
此處の道理を能く考へ何方よ不足もあいやうよ能う打解けて下されや
言葉巧に云ひませば委細を知つたる強一聲も様子も恭やしくお言葉も預
り年甲斐もあき強一恐縮も存じまする別段わたくし置きまして斯うと
申す積のござりませぬが何分よも我意をお慕り遊ばすのでと云ふを後室

かし止め」さだめて爾うでもあらうけれど、彼方のお氣質も日頃から能うく
 知り抜いて居るお前のと、只だ勘辨を頼みますや、イヤ、勘辨するの爲ぬ
 のと主家來の中又爾れ程違つたとはござりませぬ、決して腹に何んとも
 思ひはいたしませぬが、お聞きなされたでもござりませうが、餘りと云へば
 お情をい今夜の所行呆れて物も申されませぬ、猫兒一匹養子貰へばと
 て、それ相應の作法のあるよ云い、何處のものとも知れぬものを、能く耻
 かしいとも覺し召さすのめく、連れてお出なさいました「今は子爵も堪え
 かね、思はず後方を振返へるを、後室目敏く制し止め」ホンニ今夜の所行と云
 へば、宵よお連れおされたお娘、少々とわたし見込みがありませぬ故、當分
 緊々地と預ります「子爵は我を忘れて前み出で」それでは母上何んと仰やい
 ます、疾うよ約束の極まつて居る彼の姫をお手許にお預かりおされるとは
 「サツ、不足でござりませう、それを知らぬと申しはしませぬ、子爵はいよ」

打驚き、ナニ自分が不足を承知して、故意をお預り下さるとは、イヤ、故意と
 預かりはいたしませぬ、家が淫逸もありませぬ、ハテそれが其方分りませ
 て置きます、ナニ家が淫逸もありませぬ、ハテそれが其方分りませ
 ぬか、おんば約束があるよもせよ、何萬石の大守と云はれた家筋よ、着のみ着
 のま、作法もあき、駆出し娘は添はされませぬ、モシ母上、着のみ着のま、な
 き、は飛んだと、當時、門地と云ひ、身代と云ひ、誰とて及ばぬ、遠田伯のお
 娘、子不釣合ではござりませぬ、イヤ、遠田伯の娘、子不釣合ではござりませぬ、
 はあ、イヤ、何れにしても、此處暫らくの間は、母がたしかに預つて、よく
 く、吟味をいたします、先それまでは、明日よとして、奥へは一切足踏みも、お
 断り申して置きます、意外の言葉、子爵は太く驚きしが、かねて疑かけた
 る筋もあ、此處にて云ひ争はんも無駄な事と、敏くも心よ、思案を定め、成程
 承はつて見ますれば、自分の不行届きでござります、併し一旦、勝ふて來まし

たもの返へすと云ふも出来ませねば只だ一日ありとも早く心解け晴れて嫁女と仰やるやう今改めてわたくしよとお願ひ申して置きまする「云へば後室打笑ひ」ホ、それは其方が云はずとも世間晴れて好い夫婦とわたしは云はせて見せませう「何分ともよお願ひ申し上げます」子爵は腕を拱きたるまゝ差し俯視して居たりしがそれと氣注ぎて顔を上げ「母上シテお附き申せし彼の女中は後室は最と冷やかゝ此方を見かへ」彼れは先刻門前から逐放させて置きました「エッ」身上の知れぬ下司女無用心でありませぬ。

第十一回

飭の花掌中の珠荒き風も吹かせず冊かれたる身の可憐しや今日吹き初むる汐風にいと袂も朽ぬべし當麻子爵が心ばかりの二世の妻縁も薄き梅子姫は彼の夜子爵も伴はれて松平の邸に入ると一齊しく後室の目見得濟して意ひの外又手安かりしを打悦び案内されたる奥の間の八疊ばかり

なるよお春と二人さしむかひ子爵の来るを今かくと待つ程よ十時の時計の響く頃腰元一人現はれ出で「お厄添のお女中さま、御前のお召しよござりませす」お春を促し行きたる後誰とて来るものもさく聽て二時間あまり過し頃廊下傳ひよコトくと開ゆる物音春や返りしと延び上がれば六十餘りの怖ろし氣ある女中襖を明けて手と支へ「お召し替へを遊ばしませ、お寐間は此方よござります」姫は速かゝ浪打つ心地耳より頬を紅葉と染めて差し俯視く老婆はニヤリと打笑ひ「テモ御初心とござります、何んのお耻かしいものでござりませう、サ、斯うお越し遊ばせ、御前がお待かねで入らせられます」振袖の袂ひねりつ面耻氣に身を起せば「ドレ、御案内を」雪洞とつて前よ立ち廊下いくつか過ぎて最と奥まりたる小座敷の前よ出で、塗骨の障子靜かゝ開き「彼方と違ひ、此處はか靜かゝござります、サ、御寐遊ばしませ、只今御前もお越しでござります、御用がおあり遊ばさばこの呼鈴をお鳴ら

七十二
 し下さりませ」行かんとするを姫は堪らず呼び止めて「先刻子爵さまからか
 召しよなりました召使ひの春と申しますものは何れへ参つて居りますか
 御用が済めば鳥渡か逢せ下さりませ」老婆は咳しつゝ此方をむき「ハイ、
 直よ御機嫌を伺ひますやう申し傳へるでござります」紙障締め切つて出た
 る後は深殿寂として四下よ聞ゆる聲もあく、ハラ／＼と時雨誘ふて相も落
 つる風寒し、姫は心細さよ其方此方と見まはせば六疊の座敷二た間の闕よ
 黔く煤びたる黒緋の襖物凄く、床は一幅をかけて何時炷き籠めし沈香の名
 残の香爐も哀はれなり、申牌下りの絹の衾夜寒の風よは堪えざるべく、油よ
 汚れし林の紙もうとまじ、姫は身も引き入れらるゝ心地して影ほの暗き
 短檠の燈花頻りとかき立て、は、お春遅しと待詫びしが、一時も過ぎ二時に
 も今は程もあく沈々として眠るが如き一室いよく静かよ、聴ては油も盡
 きしと覺しく、ボンヤリと明くまた暗く、スワヤと見る間も隙渡る風のサツ

と落して、鈍くも燈花はパツタリ消えぬ人を呼ばんも端なく自から行かん
 は知らぬ勝手の氣遣はしく如何はせんと起つたを居たを獨りいろ／＼氣
 を揉みしが、果は怖さ恐ろしき堪へかねて袂に顔を押し包み、慄ふ俯して潜
 めとこそは泣き居たれ折から雨戸の方より何やらカカリと物音せし、姫は
 不審と身を起せば、外の方より三寸ばかり戸を押し入狭の月の風氣なが
 ら差し入れたを、見るよ、姫はナリ毛よ水をうたれし如く「アレッ」と云ふも
 口の中身を顔はせて暗き方へと隠れ寄る、外には男の聲低く「モシ姫さま、決
 して怖いものではございませぬ何方にお出遊ばす、モシ姫さま、回下憚る其
 上、我が名を知るも訝かしと、怖さも忘れて姫は障子を押し開き、隙渡る月
 光よ透かし見る「オ、其處よお出遊ばしましたか、顔よお覺はさい、替わたく
 し、お春さまからか聞き及びもありませんでしたか、吉田孝助と申します」聞いて
 姫は打首肯「爾んちらかね／＼聞いて居た孝助と云ふはお前のとか」「ハイ

下人の名前が聞きよ達し斯んを悦ばしとはございませぬ」シテ此處へ其方の來ましたの」お春さまのお言傳でございませぬ」ナニ春の言傳を」モシ貴女の何んよも存じのございませぬが、お春さまの宵に此の邸を追ひ出されました」エ、サ、喚驚り遊ばすも、傍道、何處の國よか當節がら、斯様な無法の家のあつたものぢやアございませぬ」シテ、春が追ひ出された其仔細、それを話し申して居りました、人目の怖れがございませぬ、お春さまの申しますよ、所詮斯う云ふ摸樣では素直な傍道も難かしく、何とかな角を立て、屹度、傍離縁沙汰でございませぬが、必ず短氣をお出し遊ばさず、春が首尾好くお添はせ申すまで、實は傍道遊ばしませぬ、お里の手前もありません故、無法をお取扱ひもいたしませぬ、只だ何事も子爵さまの、お爲めどお堪え下さいませし、何れ委細の孝助からと、斯様に申して居りました」姫の少しく打案じ、何うしたとかど、今まで待つて居りましたが、ホンニ思ひも寄ら

ぬと「眉を翳めて獨語く如く物語れば、孝助一段聲低く、彼方のお坐敷で、殿さまが、サツ御心配でございませぬが、お憫然さうに、誰とてお味方いたすものもあく、仰やるとの一ツ、反古同様又しますので、大層辯してお出遊はします」姫はいと、氣の毒げに「シテ子爵さまは何方にお出遊はすへ」ハイ申しかねるとではございませぬが、今日から決して奥へお出のなきやう、後室さまのお吩咐だと申します」姫はいよく「呆れ果て、入側口よ坐したるま、我もあらで眺め居る、孝助あたりを見まはして」月も退入ッて、何うやら東も白んで参りました、他人よ目附ッては、孝助ばかりか、貴女さまのお迷惑もありませんと、今日はこれでお暇をいたします、姫は屹度おもひ定めし様子にて「春よお前途ひましたら、必ず心よかけて呉れるやう、不束おがらわたしも、此處へ來たからは、影日向より殿さまへ、お力添えをもする積り、お前も時々顔を見せ、たよりとあッて呉れるやう、わたくしからも頼みます」云はれて

孝助頭を下げ、其とあらば此孝助一命活えて居ります間、恥度お護り申しませ、名残り惜しうは思ひますが、見咎められでもしませぬ中、成程爾んあらぬと、またか目通りをいたします。雨戸こつそり引き締めて、一と、我薄影たかき庭の千草を分ゆけば、露は消えゆく鈴虫の、曉寒く音も細る。

第 十 三 回

「大哥、何うだい斯う朝ッばらから湯も遣入ッて、一杯引ッかけた心持ア、何んとも云はれたものぢやアねへ」爾ふよ、昨宵の持越しかと思ッて居たが、一とッ風呂遣入ッたら、全然と直ッて好い心持だ、ハ、ア、持越す筈さ、何んだッてお前、彼様な茶積茶碗あんか、で飲みなさるのだ、イヤ手前、何時も爾う云ふが、彼の味ア下戸の知らねへとさ、成程爾うかも知れねへ、酒ハ大哥の酒が一番旨いと、昨宵彼の妓が云ッてたよ、遊んぢやア手前が好いのか、笑はしやアがるさ、ナアニお前、惚氣あんかぢやねへ、わナ、眞箇は彼の妓が酒アお前、限

ると云ッてたからさ、イヤ爾うかも知れねへ、彼奴も好い大概を、嘆ひされた先度も三次の野郎が面も似合はず、大きなコップで献さしやアがッたを、乃公アコッブハ、嫌へだど受けあかつたら、助て還ると吐かしやアがッて、何うだいマア、一合から遣入る大きき奴で、ガフ、息も繼がず、又飲でしやアがッた、オヤ大哥、今度ハお前のお惚氣か、馬鹿ア云へ、イヤ併し此位、ぬ罪があくッて好いものはねへ、手前ハ乃公と違ッて酒も大して飲みやアしねへし、剛氣よ、猫を冠ッて居やアがるから、旨く好かれるやうよ、出来て居らア、ナアニ評判程でもねへのさ、巫山戯るあへ、少ッと水をむけるを、最う彼れた、公園の料理屋、一直の小坐敷よ、小鍋圍んで、献しッ押へッ酒酌み交はずは、孝助の宗悦と、天然痘の仙太、四下よ人もなき、氣散じさの、高調子よ、笑ひ興じて、飲む程よ、仙太ハ痛く、酩酊して言葉の綾もしごろなり、宗悦仕澄し、顔よ、猪口を乾し、コレ大哥、あんば空ッ腹の朝酒でも、餘まど意氣地がねへ、ぢやアねへか、

七十八
献す杯を仙太は受けて下し置き「ナアニ飲めねへとはねへが最う此上は勿
体ねへからさ」コウ大哥其様まとはお前の云ふ盛詞ぢやアねへ、あんだお前
松平家の大達もの中嶋強一とも云はれる方の大か氣入りの大哥ぢやア
ねへか因循も好い加減よしあせへを「云はれて仙太は打笑ひ」ハ、能く手
前は中島く〜と云ひ出すが何んぞ詮議の筋でもあると云ふのか「何心あき
一言宗悦ぎよと驚きあがらも左あらぬ体」詮議も何もあまやしあいが、お
蔭で乃公も奉公が出来、按摩の手間もお庭の掃除でもして居れば氣樂よ喰
へると云ふもの、彦前は三次よ任かして置いて何處へゆくも旦那のお
伴、ヤレ柳橋が何うだ、ソレ新橋がど、唾の垂れるやうな大哥の身分乃公ア蒲
山しくってあらねへのだ「仙太は得意氣に首肯きて」イヤ、手前あがは出世の
早いと云ふものだ、見ろ、誰だど云って斯様あま我儘あものはあまりやアし
ねへ乃公あまは何うして此處まで登るよは、怖い思ひも幾度したか知れや

アしあ、オイ大哥、怖へ思ひと云ひあさるが、お前旅へでもお伴をしたのか
「ナアニ旅ぢやアねへが」云はんとせしが俄よ心附きたる如くよ口を噤み「宗
や此癖は最う癪して呉れ、乃公ア彦免だ」定悦再び猪口を献し、厭なら厭で聞
かうとは云はねへが何んよしても斯うお前が信用せられるのは、乃公等の
やうな唐偏朴とは、何處かに違つたところがあるのさ「ナアニ何處又違つた
ところがあるものか、只だ膽ッ玉の坐つた奴が強いのだ」宗悦少し打笑ひ「膽
ッ玉の坐つたのが強へのから、乃公あんずは彈りあがら、餘まり、後れは取ら
ねへのさ」仙太は下目ヌサロリと見て「大休生を云って置け、イケ馬鹿々々し
い、手前あまが何んで癖にあるものか、コレ見ろ、三十餘ヶ所の刀痕を、悪く地
ぐって云ふぢやアねへが、脛から肩へ此通りだ、兩肌ぬいで大胡坐、宗悦頻り
と眺め見て「随分大した痕ではあるが、勝楽か喧嘩の印だらう、お前の前だが
オイ大哥、乃公ア人を殺したところがあるのさ」ナニ人を、嘘を吐け、猫や犬ぢや

あるめへし何うして手前を殺されるものか「コレサ大哥あんで嘘を吐くものか嘘舌ッて貰ッちやア困る譯だがお前と乃公の中ぢやアいか何れも隠し立をするとなねへ恰好三年跡の今頃だ、マメ上總の木更津に居る時分源六大哥の世話もありちよッくら持を遣ッて居る中化粧の宗次と云ふ奴の喉が目も附きいろく」と無理な手段も遣ッた末、どうく其奴を口説落し、浮雲ねへ首尾を遣ッて居たが、何時か宗次も唄き附けられ、明日は賢怒りするよと云ふ、きわいところを開き出し、何うせ死ぬから彼奴も連れて其晩抜刀で飛び込んで、首尾好く殺して仕舞ッたが、其まゝ土地も居られぬゆゑ斯う云ふ姿も様を變へ、按摩もあッて彼所へ這入り、旨く忍んで居る譯さ、大哥あんと喫驚をなすッたらうね」聞て仙太は冷笑ひ「あんで喫驚するものか、乃公も今年で恰度十三年、死んだ佛の年回も數へく、て此頃では、夢よも思ッて見やアしねへが、六十餘の瘡疥爺、喰ッた毒の利目が薄

く野太打まはッて騒ぐのを不圖も惹て殺したが、彼のシヤツ面を思ひ出すと、乃公ア氣味が悪くッて堪らねへ」宗悦こゝろも驚きあがら、爾んさらか前も殺した覺えがあるよと云ふのか、コリヤア一番見損ッた「ナアニ權兵衛太郎兵衛位ぬあら、一人や二人あんの間尺もあやアしねへが、大きき面をして居る奴は、不思議な怯氣が出るものさ」容易あらざる仙太が言葉も、宗悦太く驚きしが、根こそぎ尋ねて云はせんものさ、膝かし進めて問ひかくるを、仙太は五月蠅く頭を振り「其奴は今も云ふ通り、乃公ア氣分が悪くッてあらねへから、最う彼の斬は伊免だよ」お前も強へ々々と云ふよ、似合はねへ、妙をとを云ひささるが、此奴が神經と云ふのだらうよ、大ドロくで出られちやア、なんば氣強くして居ても、喫驚敗毛と云ふ奴さ、ハ、ハ、天口開いて打笑ふ「じやア大哥、そろく今日歸るとしやうか」ウム、それが好い飛んだ斬を喰ひ附けられて、旦那の名前でも出た日、やア此方ア飯の喰ひ上げだ、大哥旦那

とお前の云ひあすつたのは乃公が旦那の強一さまかへ「ナアニ旦那と云ふ
あア爾うた手前の知らぬへ叔父さんさ。

第 十 四 回

「彦前さま飛んだとが出来ました」額を盛り埋めて涙あがらに謝まるを平然
として聞き流す遠田伯爵がき掛左手み捻って笑みつ、「ウム春か出し扱
けよ飛んだとどの何か葉の啞か」お春は僅かに頭を上げ「ハイ、お聞きに達し
まするも恐れ入ったとではございませうが實は昨夜「云」んとするを押し止
め「其儀ならば改め聞くも詮ない」とぢや」詮あいとと彦意遊ばすからは、それ
でいもしや彦前さまよ「今朝この方より使を差しむけたるところ、伊豆田
あよがしと申す執事とやらが應接し出で、たしか又姫は預かつたが、婚儀の
とハ改めて挨拶いたすと不審を口振、これから様子を探つて見ると、其方ハ
即座よ逐放され、子爵までが大分窮命よ逢はれる様子、彼の位さとのあらう

とは、素より覺悟をして居たところ、何んの心配は無用なとぢや」大度の言葉
よお春はいよ／＼耻入つて「爾う彦存じよ入らせられませすれば、重ねて申し
はいたしませぬが、姫さまのお望とは申しますもの、お勧めいたしたこの
私、彦前さまをはじめ奥さまも實よ申譯がござりませぬ」百は殊更機嫌好
く「ヤイあんの其方よ申譯がないとがあらうが、假令難儀よ逢ふとも子爵と
密ひたい葉が願ひぢや、随分事は難かしからうが、夫婦互に相談して家の規
模でも立つとあら、女一生の役目も立ち、本夫の幸福とも云ふものぢや、最初
からして波風立たずゆくものあらば、予も沼田へ行けとは勧めぬ筈ぢや、手
等へ氣兼ねは無用にして、其方がためよは三代相恩の主君と云ふ、松平子爵を
影あがら彦厄保申すが好いぢや」お春は我知らず席を這って辭誼を施し「ハイ、
身よ餘りましたるお言葉有難ふ存じます、天よも地よも姫さまとては只お
一人のお葉さま、親御のか身としてマア何れ程よ可憐しう覺し召し遊ば

さうもの、わたくしへのお心遣ひとして其お辞冥加過ぎて申さう言葉もど
 ざりませぬ「ハテ何も縁づくぢや其方が其様に心配するとはない」伯は再び
 口を開き「松平家の事情も略ぼ推察はいたし居るが、兎角安堵のあらぬ模様
 もあり、子爵若年の身と侮つて如何ある間違ひも出来せんよは、それこ
 そ當麻一家の耻のみならず、世の上流と立てらるゝ華族一般の好い耻晒し、
 爾う云ふとのあいやうよ、充分注意をせねばならぬが、其方は如何いたして
 遣る積りか「お春は思ひ定めたる様子よて」女子の身の誰をたより又相談と
 ても出来ませぬを、知邊のものよ少ツと心當りのござりますれば、出来るだ
 けは屹度遣つて見たい考よござります」ナニ、知邊のものがあるを申すか、ウ
 ム、イヤ其方のとゆゑ手落も多分あるまいが、滅多あるものよ云ひ出して、後悔
 あるをしてはあらぬ「ハイ重ねくの、浮心添、お嬉しうづんじます、就きまし
 て、御前さまへお願ひ申し上げますは、今日かざり此春よ、お暇を下し置かれ

まするやう折入つてお願ひ申しまする」伯は眉根をよせて此方をむき「ナ
 ニ暇を呉れ、ウム今日からは随分と忙はしい其方が身の上願ひとあれば何
 時でも暇を取らせぬものでもあいが、朝夕郎は寐泊りして、其方が勝手よ出
 歩くとも、此處よ遠慮は少しも要らぬ、それも強ひてと止めはせぬ、何れなり
 とも其方の、了簡次第よいたすが好いワ」ハイ勿体ないお情難有ふは、ずんじ
 まするが、斯う、御奉公をいたして居りましては却つて手筈も悪いと考へま
 すれば、只た何事か不埒なとでもしましたやうよ、御沙汰をなされて今日か
 ざり、お暇下されまするやう、お願ひ申し上げまする」伯は暫く小首を傾け、じ
 ャと此方を睨め居りしが、頓て小膝をツトと打ち、如何さまこれは其方の申
 す通り、當家よ居ては何かの妨害ともなるであらう、何處へありと立越せぢ
 やが、シテ落着くところは、根岸の家であらうの「ハイ成るべく人目を窺みま
 じて、根岸へ参る積りよござります」オ、それが好からう、自然金銭その他何

事よも不自由あらば何時ありと、當家に遠慮は無用ぢやア「ハイ」有難過ぎた其の言葉厚くお禮を申し上げます「イヤ男子も及ばぬ其方が精神光成殆んど感服いたした」か春の其日の中より引取りて根岸の里へ赴きしが二三日過ぎて再び伯を尋ね來つ頻りと嘲の其中へ襖を明けて給持のもの「か春さま、何誰だか見知らぬ修仁が、お勝手口から参りまして、貴女がお出あらか合はせ申して呉れと申されますが、如何いたしませう、名前はたしか孝助とか聞きました」か春の丁寧な辞遣をあし「これは恐れ入ります、只今面會いたしません」云ひつゝ伯に打ちかひ「少と他聞を憚りますものゝ参りましたれば、お奥の應接を拜借願ひたう存じます」イヤ奥でも二階でも其方が勝手よいたせ「か春は會釋して最と奥まじたる應接へゆき、故意と振を外して待つところへ案内よ連れて孝助がッと入る」か春さま先夜はサツか困りなされましたらう「ナニわたしは困りはしませぬが、か可愛さうよサツか姫さまが伊

心配遊ばしたであらうと、それが案じられておまませぬ「イヤ、道理でござります、彼様を因業を真似をせられては男だつて堪つたものぢやアございません」爾うしてか前彼の折頼んで置いた傳言は首尾好く姫さまよ云つてお呉れか「彼の傳言でございますか、彼れは旨く遣つて退けましたか、モヤ貴女、馴染は淺うござりまするし、それに何だか彼の中島が何時と違つて何程腹を揉みましても、マンナリとも寐ませんので、實に困つて仕舞ひました」「ホンニ爾うでありませう、シテ姫さまは何とかか言葉があましましたか」「ハイ、二度と里へ歸らず、子爵さまのお力にもあつてお上げ申したく、春よも能うく頼んで置いて呉れと、しみじみか言傳でございしました」云ひつゝ、尙も聲をひそめ、委しい其夜のか断は、又改めて申しまするが、不思議なとは彼の仙太、日常からして我儘氣随ふ立まはるを流石の中島が黙つて居るは何か仔細のあると、目星しを着けて置きましたゆゑ、昨宵彼奴を吉原へ連れ出

八十八
 じ段々様子を探ッて見ますと、これ程我儘の出来るのは、怖ひ思ひをしたか
 蔭だと可笑しなとを云ひますから、人は殺した覺へがあると畏をかけて聞
 きますと、身分のある六十あまの男をば、殺して恰好十三年、それより中島
 強一がたしか又關係して居る様子、疑ッて見れば日頃か達者と聞きました
 大殿さまの、俄かよは他界遊ばして、今茲が積ッて十三回忌、不思議と合ふの
 も何うやら可笑しく、餘もやと思ッては居りますすが、何も参考と存じまし
 て、お嘸し申して置きまする云はれてお春は打驚き「ホンニ爾う云へばうろ
 覺ながら思ひ出す、十三年跡の十月四日、大殿さまの、俄かよは死亡遊ばした
 ら、何の、病氣とも人に、知れず、折ふし今の後室さまが、浮懷妊遊ばしてか
 二箇月、か高老の殿さまより、お珍らしいとお祝ひ申そ、其中で、願死同様に死
 亡遊ばし、浮懷は、一と方ならぬ、浮懷雜と、母のむかし語り又聞きましたが、そ
 れで、何もしや仙太とやらが「サアこの、浮治世も大それた爾んあともあるま

いが、萬血譯も仔細もあいとを、仙太が饒舌らう等、はあく、實の拙者も此とば
 かりは、何うも不審でありませぬ「お春の、じつと思案して「マア、何んよしても
 根深く、蔓る彼の、強一、如何あるとを謀ッて居るやら分からねば、かあらす、扱
 目の、あいやうよ、能く探偵を願ひますぞ、イヤ、其儀の、決して、浮心配を、さいま
 す、あ、人畜生の、強一、め、後室さまを、捕まして、何ん、あ、真似をしやうやら、少しも
 油断は、なりませぬ、以前と、違ひ、此方から、姫さまも、行ッて、お出遊ばすと、で、
 あり、何時まで、捨ても、置かれねば、定めて、例の、強一が、何か、工む、違ひ、ある
 まい、萬事、よ、い、よく、氣を着けて、浮前の、お爲を、計るやうか、前よ、確乎と、願ひ
 ましたぞ、荷は、も、密々、語らふて、其日、其ま、分かれけり。

第 十 五 回

夜通し吹き通したる風の今朝も、尙ほ吹き荒れて、庭の、桐の、折る、ばかり、離
 らも見る、く、倒されて、物凄まじき、風雨の中を、鞭聲高く、當麻家、指して、次第に

縁込む馬車の数々戸を開いて第一番降り立ッたる仇野侯爵續いて坊
 城子爵幸田男爵いづれも松平家親近の縁類十名あまき着到の順を乱さず
 客間へ通るを白き小倉の袴又質素を装ふ中島強一、二々々會釋して途の末
 坐よ身を退け「かゝる暴風雨の中を遠慮もいたさず、一統か揃ひを願ひ
 ましたるは、當家の浮沈も關はる一大事意故と永胤さま相省きましたる
 も此處の事篤と、相談下さるやう、後室に替ッてお願ひ申し上げます」上
 座の仇野侯爵訝かし氣「當家浮沈もかゝはる大事とは、強一どの如何ある
 仔細か、巨細も予等へ聞かされよ」云はれて強一頭を下「申し上ぐるも面目
 なき、當主の放埒、臣子の分として口も出すは、熱氣を呑むの心地よござい
 ますれど、云はねばお家五代の汚辱辱と強一慮外ながら存じますれば、涙を
 呑んで、汚覽も入る、此一通、強前さま方篤と、汚覽を願ひます」白き幅紗も
 包める一通取り出すを、侯爵手も取ッツツと讀みて、打驚き、溜息吐きて

坊城子爵も手渡しす子爵も太く驚きて次席へ次第一讀みて渡しつゝ、
 何れも茫然として呆れ果たる様子あり暫くして侯爵静かよ口を開き「強一
 どの、遠田家の令嬢梅子を當家へ遣はせしは、いよく以て伯の野心も相違
 はあいと申さるゝか、問はれて強一威儀を正し「巨細はそれと記して置きま
 したが、何とも以て心得がたき遠田伯が今度の一條、此まゝにして差し置か
 ば、當家、汚財政の上よまで干渉され、如何ある所置をせられんか、危険至極
 と存じまする」云へば侯爵打首肯「如何さまお前の申す通り、日頭仁義ある方
 とは心得居るが、利慾も迷ふが人情ぢや、見と云ふを笠も着て有福無双と聞
 ねたる松平一家の財産を我が手心も振舞はんどの、イヤ淺猿しき伯の了簡
 シテ其仔細の如何なるところより聞き出されしか、強一ハツと頭を下「其
 お尋ねが、出ませうかと、實の先刻より心配いたして居りましたが、吳々も他
 言の無用に頼むと、堅たく汚契約をいたしましたる、強一のか名前、これよハ

強一當惑よござりませす「侯爵聞いて膝を前め」スリヤ何人が証言せしと云ふ
 其名を此處よの云はれぬと云ふ「云ふよ仔細のござりませぬが他言は恥度い
 たさぬを男同士の口約束、それゆゑ強一困り入ります」イヤ強一の如何
 男同士の約束とて紳士の身分は關はると、除人は知らず我々よ云ふて云
 れぬ等はあるまい「問はれて強一頭を下げ、默然として言葉あし、坊城子爵前
 み出で」如何さまこれは仇野侯の仰やる通り、云はぬと云ふも事よるべし。
 人一人の名譽も瑕を着けるか着けぬ切通の場合、証言立てし其人の名前
 を云はれぬ道理はあし無根の事を申すかと、サ他人は疑はれても仕方ある
 るまい、強一さの能く多思案をなさるが好い「侯爵少しく不興氣よ」イヤ云
 んと申すを絶つてと云ふも無益とぞや、自分は多少用事もござれば今日
 はこれよて多免を蒙る「立んとすれば、強一周章て廻り留め」イヤこれの固一
 誤りました、餘事と違つてお家の大事、継令不足を受けふとも、更に後悔いた

しますまい暫くか控へ下されたし「引き留められて侯爵再び坐し復へれば、
 強一静かよ口を開き」遠田伯よ「多當家横領の野心あると、沼田男爵存じよ
 ござりませす」きつぱり云へば一座の面々打驚き「ナニ沼田大佐が承知とは」イ
 ヤこれよは段々仔細のあると、篤とお聞きを願ひます、多前さま方何れも多
 存知よ入らせられます通り、彼の男爵さまは武人の中よも取分け雑伐な方
 と見え、これまで然るべき多令闘もお持ちなさらす、勤めの餘暇よは酔ふて
 ばかりお暮しなさるが、猥みと承はりましたよ、何時頃よりか遠田家の令嬢
 梅子さまをお見初めなされ、是非とも妻女に欲しいとあつて、伯爵さまへも
 お頼みよあり、また令嬢も多承知なされた様子よて、自分の紋を彫らせた指
 環を沼田男爵よお渡しなされ、何處に置るところもあく、未は夫婦と親しみ
 合つてお出の中へ、爾うとも知らず多當主より多縁映のお囁出で、と方あ
 らずお逆上せの様子よ能き幸ひと、伯爵が令嬢梅子よ云ひ含め、前後の思慮

も辨別なき、彦前を欺き、体よく當家より連れ込ませ、時節を俟って自から權威を振りたいたい伯爵、イヤハヤ人は見掛よりませぬ、聞くより短慮の侯爵、顔色變へ「ッテ、それ程の大事を心得ながら、何故またお連れ申させられた、イヤお連れおさるを存せしならば、此後悔はござりませぬが、何を申すも御當主さまのとはあり、夜會の歸り、連れ込まれ、何んと彦諫言申し上げても要らざる世話とお聞き入れなく、刺へ二度と申さば手は見せぬと、長押にかけたる大身の鎧の鞘をはらって、振まはされ、危険至極のお振舞失禮ながら、彦狂氣の彦沙汰かど、永年お傳申した此強一心痛いたし居ります、スリヤ何んと云はる、鎧を捻つてむかはれしとか、お耳に入れますも主人の耻、彦内聞願ひますが、如何あるものか、兩三年動ともすればお氣荒く、口を極めて、罵るおどは愚なと、拳を舉げて人を打ち、脚を飛ばして器物を蹴倒し、言語同斷の彦所行日、慕らせ、殊も此程の彦諫言を憎つくしと、素鎧を取つてお庭の

中を追つかけられし其危さ、幸ひ少しの覺もあざ、無事にお止め申しました、如何あるとになど行きまするか、彦運の末が思ひ遣られておませぬ、言葉乗巧みよ欺けば、侯爵はじめ一座の方々、顔見合はして茫然たゞ、稍あてて侯爵太息をホツと吐き、「イヤ、淺猿しいは松平家の運命、天晴れ器量も優れて目立ちしものが、兵器を取って脅迫がましき振舞おすとは、言語も絶せし子爵の行跡、殊も一旦の約束はあるもせよ、自儘に姫を迎へるなどとは、何様以て穩かおらず、シテ遠田家の令嬢は如何おされしか、強一スツと前み出で「彦前よ、落度はあるもせよ、工みたくんで、差しむけられたる梅子さま、即座にお返し申したとて、素直に引取られもあされまじと、其夜の中に内々後室へ申し上げ、お奥の中、女中二人を附け添へて、緊々地とお護り申して居とます、然らば定成さのとの交通は、素よと固くお距て申し、斷じてお逢はせ申しませぬ、幸田男爵おきたを見返す、如何も若もの、血氣爛んお年紀とは

九十六
 云へ果れ果たる子爵の振舞、ヤレ南校の慶應義塾のと華族とも云はるゝもの
 のが身分を忘れ、町人百姓の子卒と一所に育つたこれも爲さ身不肖ながら
 自分おどは、爾ふ云ふ養育はいたさぬ積じや「イヤ爾う、前より仰やられます
 と強一赤面の外、ひござりませぬ」男爵の得意らし氣は打笑ひ「ハ、ハ、イヤ其
 許をお笑ひ申すでござらく、あいが、何んよいたせ不所存極まる若もの、
 一家一門の耻辱である、華族仲間、の面汚しぢや、サッサと始末を附けた上、隠
 居よなりと何なりと奇麗な形を着けたが好いワ」云はれて強一得たり顔よ
 坐を前み「其お断はかねてより、舊藩士のもの一同願ふところよござります
 れど、容易ならざるとよもあり、前さまがた、御賢慮の程も測りかね、何れも
 差し控えて居りまする」口賢く云ひませば、坊城子爵四下を見廻つて「ハテ
 舊藩士一同の願ひと云ひ、現在家令の其許までが異存がないと思はるゝも
 の、假しや親族縁者として、予等よ否やのあらう筈、いさし、思ひく通りよあされ

よぢやが、シテ跡目よ立てる若どのの「強一いよく、乘氣よあり」坊城主のお
 胤と云ふてもござりませぬが、大殿、御他界の其年に、お生れありし、次男重
 次郎さま、お氣質の優々として、文學諸般の、御發明さ、お年は僅かお十三よ
 ざりませぬ、廿歳前後の若ものより、御器量勝れてお出ゆゑ、此君お世繼遊
 ばさばと、何れもお望み申して居りまする、成程、次男の重次郎どの、イヤ彼
 の若さまおあらば、大丈夫ぢや、早速、爾うと断を極めて、家督をお譲り申すが好
 からう「坊城子爵が頻りに煽る尾よつきて、幸田男爵親切顔「イヤ爾うお断の
 定めるもの、當主定成どのよ、別して、御慈愛、御後室さま、重次郎どの、
 御家督に、何んお、御異見あらうも、知れず、強一どの、この邊、如何でござる
 の」イエ、疏石お情ふかき後室も、御當主さまの行跡に、全く愛憎を盡かされ
 てか、困つたもの、此頃では、只だ心配に、日を暮され、それらの加減か、何うや
 ら、御氣分もお、御勝よ見受けられ、今日のお集りよ、も物敷あらぬ自分よ代

を申し附けらるゝ程はござりませぬが、重大郎さまはお腹のとよもあり
 ますれば他人の思はく心苦しど、かねてお話もありましたが、伊親類がたの
 お勧めよて、退ツ引あらぬとあらば、何うともあらうと此強一は、内々存じて
 居りまする「倭辨奸智」の強一は口よ任かせて置き立つれば、坊城幸田は云ふ
 も更なり、列座の面々誰も一言の異議もあらず、隠居の相談今しも決せんどす
 る折から、先刻の程より黙然として考へ居たる仇野侯爵、突然として口を開
 き「隠居のお説、伊道理よは聞てえませぬが、何を申すも一家の大事、このとばか
 りは今暫く差し控へ、篤と様子を見定めたる後よても、遅いとばござるまら
 と云ふを不審と幸田男爵、膝を叩いてにじき寄り「侯爵、打て變つて伊當主の、
 肩をお持さざるゝは如何ある仔細か承はりたし、何時まで此まゝ差し置い
 て、後で後悔あされても、其時役よは立ちませぬぞ」侯爵静かよ此方を見返り
 「イヤ自分とても決して否やは申さぬが、能く考へても伊隠居、これ死跡

と云ふではあし、現在家督に据つて居らるゝもの、縦し伊不行跡があるより
 せよ、只の一度伊諫言も申し上げず、其まゝ伊隠居いたさせては、強一を
 はじめとして口添いたす舊藩士、何れも臣子の分よ背き、また我々縁類のも
 の共不親切との罵りを受けんは、定のとそれゆゑお止め申せしが、伊異見あ
 らばこれよてお伺ひ申すべし、理の當然に流石の男爵言葉もあらず、手持無沙
 汰よ後込め、強一仕損じたりと思ふ様子を色よも見せず、席を前めて恭し
 く「如何にもこれハ伊道理ある仰せ、お言葉なくハ兎かくの批難も受くべき
 ところ、伊賢慮お伺ひ申し上げたる甲斐、ハ不臣の罵りも脱れしのみか、伊
 一統の伊異見よて伊前のお身持改まり、以前よ變つて謹慎あらば、それこそ
 伊當家萬代の伊よろこび、後室よもサツ伊満足を存じまする「イヤ、左様
 よ云はるゝ程のとでもないが、伊隠居云々の相談ハ暫くお控えおさるが好
 し、飽まで直らぬものあらば、其時こそ是非よ及ばず、何分の伊相談よ及び

まじようまづそれまでは何れも自分も伊同意下さるやう呉々お願ひ申し
上げる」一座を屹度見渡し、儼然として云ひ放つ。

第 十 六 回

「中島さんサツ困りましたらうチ」四下に心を配りつゝ、静かに入り来るお修
の方、此方の儘かに見遣れるのみ、腕拱きて俯視き居る後室傍へ摺り寄つて
「仇野侯が日常のお氣質、手もあくゆくであらうと思つて居たに、最初の火の
手ど打て變つた先刻の様子、彼方が彼様よお云ひで、少と難かしうはある
まいかチ」心配顔よ差し覗けば、強一屹度顔を上げ「十のものが九ツまではと、
高をくくつて居たものを、彼の侯爵めよ邪魔立せられ此様を困つたとはあ
りやアしある」親族一統誰も異議もあいな中、何故彼の方ばかりが意地悪ふ、
彼様よ我意を徹したらうねへ」ナアニこれの此方の手ばかりが幸田男爵と
云ふ慾張男を操つて、一統落さく賄賂を配つたお影には、家督變の大事よま

で異見はあいと体好く行つた其中で、日常の氣質を知つたばかり彼の侯
爵へは何の賄賂も遣らなかつたが、其侯爵から駈れ出してとう／＼不首尾
とあつたのは、今更とあつて残念至極と「それではお前侯爵さんばかりを扱
きよしたと云ふのかへ」好んで扱いた譯じやアないが、彼の氣前では迂濶よ
云ひ出しも出来かねるからそれで故意と省いたのさ、イヤそれよしても坊
城幸田をはじめとして、ヤレ子爵で候のソレ男爵で候の、勝手熱は吹い
て居ても、金さへ見れば彼の通り、目も鼻もあいと云ふの、實も情ない奴じ
やアあいか」そりやアお前、どんか奇麗な顔はして居ても、慾と云ふ大敵よは
誰がお前叶ふものかチ」その叶はぬ中に侯爵と云變徹ものゝあるばつかと、
嘶の旨く運ばぬは思ひ出しても思々しい」切齒かめば後室故意と落着顔「ナ
アニお前、一度や二度で思ふ存分箱つて仕舞へば、何も苦勞はあまやアしな
いやチ、どうせ三度と五度は手を入れにやアならないときあ／＼案じすと

百二
 好いぢやアあいか「素よ五箱以上も出した仕事だこのまゝ引込む積りやアあいが困ったとは侯爵が何れ殿に逢った上篤と異見をすると云ふとし面會をもせられた日又は巧んだ仕事の皮は剥げ此方の仕かけた辛勞も水の泡と云ふ奴さ」この一言は後室慄然と驚きて「エ爾んあら彼の侯爵が彼れも逢はふと云ふのかへ」それゆゑ此方も心配さ、ドシを踏んで見たが好い飛んだ穴尾を押へられ、ギウの音も出るものぢやアあいか「云れて後室はいよく驚き」爾んあら爾うと手等をせねば何んあとの間違ひからか前重次郎のとも分つて涉覽な、お互ひも斯うして済しては居られぬぞへ「強一あたをを見まはして」サア手等をすると云ったところで遣ひもの、仕様もあく、爾うかと云つて斯う安閑として居ては明日にも遣つて来るかも知れず、ア何うしたものか斯様を困ったとはあいか「頼うを垂て太息を吐けば、後室じつと思案して」モン中島さん、日頃のお前も似合はぬと何んとか工夫がな

百三
 いのか子へ「あんば乃公でも是もやア賢も閉口した」エ、モン閉口したとはお前、あんば意氣地がないぢやアないか「強一屹度こなたを向き」ナニ乃公も意氣地がないと云ふのは「サア意氣地がないじやアあるまいか、なんぼ侯爵が此方の謀計は落ちぬと云つて高が籠の鳥も同様を彼様を小僧ツ子、一人位何んの雜作もあるものか子、中嶋さんわたしは疾うも覺悟を極めて居るヨ」シテ覺悟とお前の云ふのは何う云ふと極めたのか「訝かし氣も問はれて打首付き」お前は何んとお思ひか知らあいか、此ま、黙つて居る日又は所詮此方の大事ゆゑ先んずれば人を制すと、能く諭えよも云ふ通、彼の大崎又云附けて、定成を洋行させると云つて途中の海上みて海中へ突き飛ばさせたから雜作はないや子「云はんとするを強一周章て押し止め」コレサ、如何も他人の來られぬお奥でも壁と耳と云ふじやアないか、野暮も大きき聲をしあさんな「云ひつゝ、と前み出で」何んも覺悟を思つて居れば、定成殿を

殺すといふの、お家狂言じやアあるまいし、今の治世も爾んな真似が出来
 ものかお「苦み切ッて控ゆれば後室こゝど打笑ひ」マアお前も限ッて爾ん
 弱腰ではあるまいと今日の今まで思ッて居たが飛んだ見損ひと云ふもの
 さ「ナア二人のひとりや二人殺すのだ決して怖いとは思はぬが能く考へて
 も見るが好い高が縁者の侯爵を欺す骨の折れるもの、何うして盛ッてい
 も見るが好い、それこそ忽ち捉へられ折角仕かけた寸法も命と一所も寂滅
 さ、生命活らえ緩々と榮耀榮華をしたいのが、何より乃公の願ひと云ふもの
 マア往生は出来かねる「言葉素氣あく云ひ放てば後室スツと摺りよッて、爾
 んあらお前彼の侯爵のするに任せて、側でお前が見て居れば榮耀榮華が出
 来ると云ふのか、誰が黙ッて見て居るものか、お前と違ッた乃公の了簡先第
 一、彼の殿も難癖着けて押閉同様人をも途はさず坐敷の中へ立こめて、先
 頭世間も噂のあつた相馬の殿さま同然、狂氣とか何んどか人よ云ひ立て

させ、其上世間の様子を見て、お前の云ッた見込の通り、日頃飼料はカッてあ
 る、一味の者よ云ひ含めて、人よ知らさずこッそりと殺させて仕舞ふ積りさ」
 聞いて此方は莞爾と笑み「お前も爾う云ふ見込みがあれバ、わたしばかりか
 彼の重次郎も、自然と世も出る時節もあり、世間を廣ふおもしろく、お前と暮
 すは何よりたのしみ、抜からず旨く遣ッてお呉れヨ、そりやア乃公も同じと
 だ、人目よこそ若さまと、大事よかけるは居るもの、洗ッて見りやアたッた
 一人の乃公が悴だ念頭にかけあくッて何うするものか、ホンニ爾う思ひ通
 り行ッた日よは、華族仲間の物持と人よ云はれるこの邸も、土寇の下まで洗
 ひ浚ひ、お前の自由と云ふものさ、云へバ強一首を振、イヤ其處まで漕ぎ附
 けやうと思ふよは、何うして鳥渡は行かぬと、先その前に侯爵へお前が旨く
 取入ッて、當分此方へ来あいやう、体好く謀計んで貰はにやあらぬ、何も頻り
 と語ふを、誰とは知らず庭の木影も蹴踏、息を殺して伺ふ曲者。

梅 ね ほ こ

夜は何時の間もか太く更けて一天さながら墨を流す如く雨を帯びたる疾風並木の松の梢を拂って流れは濁波滔々たる行人全く絶へて橋上の瓦斯燈影眠るが如きお茶の水橋を本郷台へ差して一散も駈来る一人の男傘あかばつぼめて風を除けつ、傍目も觸らず聖堂際へ來かゝる折から立まはしたる腹贅の裡よ、オイ其處へ行くのは宗ぢやアねへか「呼び留められて訝かし氣も振返へるは按摩の宗悦四下見はし腹贅の裡へ目を配れば乃公だ仙太だ」云はれて此方は慄然として「ナニ大哥だ、レ贅を押し遣れば、酔く煤びたる手燭の燈花おぼろくと照せし有明の床見世も端をからげて烟酒あはる天然痘の仙太、ホンニ大哥だ、お前何うして此様なとこも居なさるのだ」仙太は茶碗を下置き乃公のとは兎も角この暴風雨も手前一体何處へ行くのだ「宗悦故意と落着顔」ナニお前大した用と云ふでもねへ

梅 ね ほ こ

が少々と根岸も用事があつて、わざと出かけて來た譯さ「ナニ根岸だ、ウムそれでは手前何んだ、お葉さまに附いて來た小ざつぱりとした中年増が、たしか遠田家を追ひ出されて、根岸の家も居るとか云ふが、野郎め旨く遣つて居やアがるを、コレ大哥、お前申戯を云つちやア不可ねへ、乃公ア爾んを女は遂に見たとはありやアしねへ、イヤ何んと隠したつて乃公の方よ、ナヤンと種子が上つて居るのだ」コレサ人間きの悪い、何んで乃公が爾んあとをするものかね、ナニ人聞きが悪い、籠棒め何處の國に色をして、人聞きの悪い奴があるものか、年増が彼の晩歸るとき、手前も逢つて行きたいと、勝手の女中も云つたじやアあいか、ナニお前彼の時はそれ、表が餘り暗いから提灯を貸して呉れと云つたのさ、ヘン色をするよ提灯の要る籠棒があるものか、マア好いワ、何んにしても斯う色男の多いに、閉口だ、云ひつゝ茶碗を干して差し出し「サア一杯飲め、今から廊へ出かけると、恰好時刻も二時前だ

驚き深き交際ふ、ナニ飲めぬ巫山戯たとを云ふもへ、辣味増汗と云ふ通り、大
 事な金で買った酒だ、難有いと三拜して呑むが好ひ「強ひ附けられて酔みも
 得せず、寒さ忍びとグツと傾け」雨んあら大哥、其處まで一所に歩かふか「ウ、
 それが好い」烈しき風雨を物ともせず、何か頻り又嘸し合ひ、明神下を池の端
 に出で、一と際渡き公園を笑ひ興じて行きかけしに、先刻の程より時々立ち
 止まッて、脚腹を壓ひし宗悦、何とかしけん木の根も礎と倒れ伏し、太息吐
 きて、頻り又悶へ苦しむ有様、仙太は戻ッて傍へ寄り、コレ宗や、何うした腹
 でも痛むか、コレ宗、何うした「身をからめて問ひかくれば、宗悦僅か又息を繼
 ぎ、大哥、何うしたのか、横ッ、腹が「ナニ横ッ、腹が痛む、其奴ア困ッた、コレ何
 か、強ひないか」問へど答ふる氣力もあらず、太息吐きて頻り又呻き苦しむを、仙
 太は眺めて冷笑ひ「宗悦、なんと苦しいか、イヤ、藥の利目は早へものさ」不思議
 の一言耳よこたえて、宗悦少しく眼を見ひらき「ヤ、藥の利目の早いとは」問

へば仙太はいよく「笑ひ」手前はそれを知らねへか、お茶の水の有明で、飲ま
 した酒は彼とやア毒酒さ、エ、おんと膽が潰れたか「聞て宗悦アツと驚き、苦
 しさ忘れて膝行を寄と、コ、これ仙太、そとやアお前何を云ふのだ、お前乃公
 よ、毒を飲ましたとは」サア吃驚したであらう、何も手前も恨みと云ッて
 はないか、大恩のある其人よ、頼まれて見とやア男づく、厭な仕事もせよやな
 らねへ「ナニ大恩のある其人とは、外でもねへ、強一さまだ、エツ」愕然として、絶
 く拍子も、五体は左あがら裂くるが如く、挫と地上に伏し、轉び、鮮血を吐いて
 悶ゆるを、仙太は見遣りてうろく「じく」コレ宗悦、なんぼ乃公が愚堂でも、恩
 も恨もあらず、手前を、斯様な療治はしたか、アねへが、悉皆主人の吩咐で、仕方が
 ねへと諦めろ「宗悦、苦しさと堪へて、仙太を見遣り、シテ大悪人の強一が、
 何うして乃公を殺すのだ、それ、手前の胸もあるとさ、ナ、何だぞ、人の
 知れぬと思であらうが、危い畏へ飛び込で、此方の犬を、するものを、何して知

百十
 ずよ居るものか今日も庭の植込で何か嘶を聞いたであらう旦那がふつと氣が附いて即坐す乃公を其場へ呼び手前を殺して仕舞つて呉れと云はれて見りやア據なく乃公が懐中に絶やしたとのねへ薬で旨く一杯遣つたのさ「情を知らぬ仙太の言葉よ宗悦口惜しく齒切かみ大悪人と知るあがらッ、それよ倭人であし能くも毒を飲ましやがッた踵踏さあがら立ち上る仙太の襟際緊々地と取るを素早く休をひねって撞と蹴倒しコレ巫山戯た真似をしやアがるあ優しく云へば附け上る乃公よ恨みを併べる積りか爾う云ふ手前の心あらウム好むく冥途の餓別云つて聞かすり耳の穴をかッぽじつて聞きアやがれ今から數へて見れば十三年後室さまも知らさずに内々殿を殺したのハ斯ふ云ふ乃公と彼の旦那だそれから此方後室と家來のものを抱き込んで旨くか家を横領しナンマリ汁を汲ふ積りだ蚊の脇ほどもねへものが高が女を合手よして何んあよ騒ぎまはつても何んの

役よ立つものかへ龍車よ向ふ蟻螂との生命知らずの手前がとだ王足を上げて踏みじる下よの宗悦鮮血と泥よ打ち塗れ起んと燥れど苦痛劇しく手足も滑れて競ひ得ず無念の齒切と噛み鳴らし溜息吐きて呻き居る何うだマメ往生の出来ねへか永ふ苦痛をすると云ふのも手前の罪が深いからだ友達甲斐にドレ乃公が早ふ樂をさせて遣らうか悶搔く手首を緊々地と捉へ後方へまわして匍匐させ大磐石と上り乗り曳々聲して壓し据ゆれば、憐むべし宗悦アツと一と聲振り立つる聲諸共九穴より流る鮮血の泉の如く枯々消ゆる虫の音と共果敢なく消え失せたり最う少しの手剛へ奴かと思つたよイヤ斯うして見れば弱いものさ「せへら笑つて立ち上がり、塵打ち拂つて行かんとする折暗き夜道を只一人提灯照らして來るものあり見谷められてハ一大事と石燈籠の間を縫つて新坂下へ逃げゆく仙太、すれ違ひさま翹花の光りよナツリと瞻めて周章だしう駆ゆく様子の方か

百十二
しく提灯ていとうして後方ごほうをヤツと見送りながら、「と歩あゆ二た歩あゆ後ご込こむ途端とたんはバ
ツクリと何やら物ものは騒さわぎつ、愕おどろきながら振返かえへる「や、こりやマア死骸しかいが「慄おそ
然ぜんとして思おもはず後方ごほうは退ひきしが燈花とうかは着きもの照てらして前まへみ寄り顔かほを起たし
て篤あつと膽いめ「ヤ、孝助かうすけが「獨語ひとりごとつ、怖おそさも忘わすれて抱いだき上げ涙なみだながらに聲こゑ高く
「コレ幸助さいすけわたした心こころをたしかよコレ孝助かうすけ草葉くさばの露つゆを口に含くはませ頻しばしばりよ呼よ
び立て居ゐる程ほどよ、聲こゑの儘ままかよ通とほぜしか、微かすかよ眼まなこを打う開ひらく「オ、孝助かうすけ氣きが附つ
きましたか、わたしたコレ氣きをたしかよ、緊しつ々つ地ぢと抱いだいて顔かほは燈花とうかを差さし附つ
くる、此方こなたのやうくそれと見て、兩手りゆうてを震ふるはせ口くちを開ひらき「オ、オお春はるさま遅おそ
かつた残念ざんねんをく。

第 十 八 回

哀あはれあり松平しょうへい子爵ししやくの花はなに慕こひ月つきは焦これてやうやう邸ていは連つれ込こみたる、遠とほく
田家でんけの令嬢れいじやう梅子うめこ姫ひめを彼かれの夜後室よごむろは遊あそばれて、心こころの落膽らくたんふるものさく終宵しゆうせう

居間いまは垂たれ込こめて、中島なかじまが無禮ぶらいを怒いかりもしつ、情愛じやうあいは迂まがり後室ごむろの素氣すがけあき仕
振恨ふりぐんみもしつ枕まくら欱くわて茫然ぼうぜんと、遠寺とほでらの鐘かねは明けゆく空そらを待まち詫わびしが、あがき夜
の漸やう明あけて庭にわは朝日あさひの麗うつくしく、次の間つぎのまは掃除そうじあきの物音ものおと次第しだいに聞きゆれ
ば、姫ひめの消息しよきを尋たずねんものと、襖ふすまを走はらせ此方こなたへ出いで、忍しのびやかよ二ツ三ツ手て
を拍たたてば「ハイ」と答こたへていそく来る小間遣こまぢひ子爵ししやくの傍そばへ招まき寄せ「オ、静しず
か、お前まへは聞きたいとがある襖ふすまを締しめて早はやふ此處こゝへ「手招てまきされて畏おそる、ピシヤ
リと障子しょうじ建切けんせきを子爵ししやくの前まへよ手てを支たければ、外ほかでもあいが昨宵きのう連つれて参まった姫ひめ
は、お奥おくよお居ゐるか「問とひられて此方こなたの氣遣きぢのし氣きに後方ごほうを見返みかへへと「伊い
前まへさま、其そのとばかりの伊い免めんを願ねがひまする「ナニ免めんせ、コレ何も何なにうの斯かうのと
云いふでない、只ただ様さま子このかうくと、知しつて居ゐるだけのとを嘶なして呉くれ、
ばそれで好よいのじゃ「ハイ存ぞんじて居ゐりますが「云いふも心遣こゝろぢひの様さま子こなり、子
爵ししやくのそれと意中いぢゆうは覺さり「ハ、ア何なんんじやの、子こに何事なにごとも嘶なすなど、彼の強一かため

百十四
 が申したか「お静の儘かよ首肯ながら」
 んとする折うしろの方より、最と荒々しく静を呼び立つる。此方のハツと
 動乱をし會釋そこく障子を明けて出たる後、意地悪き老婆の三度食事
 を運びしのみ、誰とて來り仕ふるものもあく煙草盆の埋火さへも消々あり、
 子爵の口惜しさを遣る方なく、強一呼びて思ふ胸中云ッて退けんと、幾度か手
 を打ち叩けどそれさへ應ずるものなし「汝れ人非人め」自から出んと飛び
 立ちしが、斯くての謀計の畏れも、同然好し左らば思はく違ひをさせて
 呉れんと、昨宵のまゝなる短檠火を點じ、手近の書冊くり擧げて落着顔を
 裝ふひしが、十二時過ぎとも覺しき頃例の老女の床敷き延べんと入り來り、
 物をも云のす出たるまゝ、再び人の氣色もせず、餘りと云へば打ッて變りし
 取なし、子爵の確と呆れ果しが、兎もあれ静かき詮やう見んものと、躍る胸
 元我れと壓へて、其まゝ座敷に垂れ込めつゝ、絶へて表へも出ざりし、雨名

百十五
 獲あく露れてそよくと袂の風の寒き夕暮、不思議や見馴れぬ女の入り來
 り、故意と愛嬌作ッて叮嚀「お前さま、お湯をお召し遊ばしませ、此ごろ滅切
 りお沈酔遊ばすので、後室さまが何んか又心配入らせられせうオホ
 い、輕薄笑ひを心憎しと、子爵の物も云はざりしが、母と云はれて捨も置
 かれず、苦々し氣又振り返り「今日少し氣分が悪い、お湯の望みでないぞ」女
 の聞いて高笑ひ「アレ又してもお前さまの無情を、何時までお垢とお穢れ
 遊ばす積りか、爾う仰やらずと少しも早ふお遣入り遊ばせ」引き立つるが如
 く、勤むるを子爵の五月蠅く拂ひ退け「ア、これく、湯の望みでないぞ云ふ
 のよ」まだ爾んあとを御意遊ばす、か体のお支障とあッての大事だからと、後
 室さまが仰せでござります「飽くまで云はれて争はんも力なく」爾んあら
 今から支度をいたせ「イエ、お支度の疾うに出來て居ります、サ斯うお越し
 遊ばせ」すゝまぬおはらも湯殿に入り、身内一と通り洗ひ流して浴衣フワリ

と肩あかけ遣戸を押して出んとするも如何なしけん堅く締めて打てども
 開かず這の訝かしと聲振立て呼べと招げと誰とて應ずるものなし子爵
 の心焦燥ちて頻る戸口を叩き居ましが不圖横手の方より開き戸付けし出
 口のあつた心付き左手を延ばして引き明くれ難く開くも心嬉しくそ
 ツと這入れれば此處の女中部屋より用ひしところ六疊ばかりの一と間小奇麗
 むの片付けたれど何時取替しまゝの疊の破れて歩けば脚は纏はんばかり
 襖も黒く煤びたるも子爵は不審の眉を寄せ「この頃まで奇麗なもつた此座
 敷が何うして斯様よ」獨斷ちつゝ進み寄る襖もそつと手をかくれば此處も
 緊々地と閉ぢ堅め打てど開かん様子ありし如何ある譯かど子爵の心は驚
 きながら驚と四下を見まはせば三方壁は塗を込めて外へ出べき道もあく
 物取拂ひし積様を故意と巧めるものと見ゆ子爵はいよく「打蕪き」南無
 三これも強一めが「切齒かんで躍り上り飛び上り拳を堅めて力任せよ襖

を打てば三寸ばかり破れたり素破こそ此處まで力を極めて引裂くもバラ
 リと音して難なく襖の二ツとありしが驚くべし何時の間か立て詰めたる
 か五寸角の儼めしきに一寸あまりの鍊鎖緊々地と組み僅かよ手首の通ふ
 ばかりを隙間とあして坐敷半は結ひ込めたり子爵の見るより挫とうしろ
 も倒れ伏し物も得云のぞ呆るゝところへ強一鷹揚も現はれ出で柵の隙間
 も顔を覗かせ「彦前斯うしてお出遊ばさば誰もお厭を諫言するものなく嘸
 樂々といたしませう」子爵の眼を見張って聲荒く「汝れ不忠不義の奸賊覺へ
 て居ろ」ッッッと睨め強一堪らず吹き出し「ハ、ハ、ハ、彦申戯を仰やるな假
 令未熟も彦主君でも此強一の家來ゆゑ決して無禮のいたしませぬ實にお
 止め申しましたが彦親族がたの彦評議で當分彦窮命をさせますのさ」云々
 云ふを吐かず大悪人の中島強一手前のやうな犬畜生も松平一家を預け
 て置いたが残念だ「髪をむしって罵れば強一いよく吹き出し」お仕置もの

よまひ言見られたものでござりませぬ少しの耻をお知り遊ばせ」毒口
現して出ゆく跡を子爵ハツと睨み付け思はず格子は飛びかゝり又思ひ
直し控と後方は座りしまゝ涙一滴齒噛みの音も哀はれあり

第 十 九 回

月雪の眺望いづこ花もあき根岸の里も世を捨人か朝夕も説經看筋殊勝
ある母と見ゆるハ六十あまり雪の切髪撫下げて荒木綿の布子に羽織を重
ねたるが寒菊の二た枝三枝手は持ちて庭前の障子スラリと押しひらき松
子松子「静かと呼べ奥の間よ」ハ「と答へていそぐ」出づる十八九の娘禪
外して坐す直る姉さん何をして居ます「問はれて娘は行儀好くハ「先刻
よから佛壇の掃除をして今お經を上げていござります」ナニお經を上
げて居ますと「ハ「爾んから恰好この寒菊お供へなされと云つてお呉れ」
差し出す花を娘は取つて坐を起し「お珍らしいか花サッ佛さまがお喜びよ

ござりませう「行かんとするを母は呼び止め」ア、これく「マメ何か御用が
「イニ用ではないが母の看經濟次第何やら話したいとあると先刻お春が
云ひました都合の好いとき何時ありと此處へ来るやう又申してお呉れ」ハ
イ「畏りました」出でゆく間もあくお春はズツと入り來り母の向ふ又坐を占
めて「大層奇麗な今のお花何處でお取り遊ばした」云へば母は機嫌好く「この
寒空は珍らしい何時もの花屋が來ましたから彼れだけ取つて置きました」
云ひつゝ膝を押し前め「お春お前わたしに断があるよ云ひましたが、シテ其
用と云ふのはへ」お春はじつと思案して「お断を願ひたいと申しましたは外
のともござりませぬ母アさま情願永のお暇を下さります」母は不審と膝
立て直し「コレお春和女は今永のお暇と云ひましたか」ハ「シテ其仔細は「訝か
し氣に問へば此方は打濡りお年を召した母アさまは斯様をお断いたしま
すも餘儀ない」と情願多勸辨を願ひます「許しいとは日頃から申し上げて

百二十
 は置きましたが女だてらよ由ある見込みを立てまして、彦前をお樂よさせ
 ましたく、いろく工夫はしましたか、お姫さまも何う遊ばしたか、誰が行ッ
 てもお逢はし申さず、彦前さまは跡の月のはじめ頃、あの相馬の殿様のよふ
 よお坐敷牢とやらへお運入り遊ばしたとの彦様子、それよ何時や新坂で
 酷たらしう毒害された孝助が、臨終の際よたつた一言云ひ残した言葉の
 様子で考へますれば、此末お家は何うありますや分からねのみか、彦前さ
 まや姫さまの、お身よもしものとはありましては、何方へもひても濟まぬ譯
 今日まで毎日ひまち駐まはり、彦親族方や舊藩士の重立つ人を説きまして
 も女を侮りお用ひなく、松平さまから方々へ、彦手當でも参ッて居るよ違ひ
 なく、所詮尋常一と通りの働きでは、何んの役も立ちますまいと、二三日と
 の方しみる、思案をいたしましが、最上此上は身を捨てても、お二位の彦安堵
 おさせ申すの外、別よ工夫はありませず、生命を捨てるとあら、維令女の瘡

腕でも、何うとかあらうと存じます、刑法上の罪人とあるを承知で、今日から
 は、思う存分して見たくも、し爾うあればいつ何時再びお目よ掛れるやら、明
 日をも知れぬわたしの覺悟、それでお暇お願ひ申します、他事なく云へば
 母は頻りに打首肯き、ホンニ和女の云ひます通り、殿さまはじめ姫さまへ、
 お可愛相お當時の彦様子、打捨置け、何のやうお間違ひあらうも知れぬと、
 和女よ爾う云ふ心があれば、何もしよ母が止めませう、只だ成るべくは身を
 大事よ輕作おとをさせぬやう、能く氣を注げねばありませぬ、口よは云へ
 ば、流石女の堪へかねて、眼よは涙の影うるむ、それでは母アさま、お聞き届け
 下さいまするか、やア代々彦思よあつた彦殿のと、年は寄ッても母ですら何
 うとも仕様はあいのものかと、絶へず苦勞よする程ゆゑ、決して止めはいたし
 ませぬ、爾う仰やッて下さりませれば、心にかゝるともなく、思ひ通りよあり
 ますと、これで安心いたします、母は静かに身を起し、押入れの裡より短刀一

口取り出し「今の浮世は斯様なもの、要らふ筈はあいが、今日から誰に憎しみ受けやうやら知れぬ身の上、用心又は用心を加へよぢや、肌身放さず持つが好い」お春は嬉しく膝前ませ袋の紐をどくく短刀出し、鞘スラリと拂ッて屹度見る、皓々たる氷の刃先振れば甲へ進しるばかり、母は傍より透し見て「この短刀は其むかし、先祖さまが浄當家へはじめてお抱えあつたとき引出もの、賜はつて此方と云ふもの、代々持ち傳へて居りますもの、お前がため又は好い、餓別、屹度大事にしませうぞ」お春は短刀取り納め「何より結構あつた、下されもの、これさへ頂戴しますれば、何んか心丈夫に存じませう、」
 今日から此處を出ると云ふのは、お前何んぞ見込みでもあるのかへ別見込みもござりませぬが、斯うして宅に居ましても、様子を探る其ためか、見馴れぬ人が常からして、此處等あたりを徘徊ひ歩き、何處へ出やうと存じませぬも、後前跟けて狙はれますのが、何うも邪魔にありませぬ、寧ろそのとよ

影を隠して仕舞ひましたら、萬事の便宜も好からうかと存じましてのとよござります、爾う云ふ譯あら、今更止めはしませぬゆゑ、和女次第で何時ありと氣儘、此處を立ッたが好い、涙片手、雨ふを襖の外、立聞きしたる妹お松、今は堪らず、ソツと一と聲泣き出し、襖開きて、駈込めば、お春は傍へ掻き寄せ、て涙は濡るおろく、聲「コレお松、情願堪忍してお呉れ、お前よばツかり、今日まで隠して居ましたは何んな、心配しようかと、それがわたしは可憐らしさよ、これまで何とも云ひませんが、實のところは怖ろしい望みを持って居ますゆゑ、所詮この世で母アさま、お恩送りは出来ませぬ、明日からお前一人して、わたしは代り母アさまへ、お宮仕えを願ひます」脊撫擦る手は、縋り、お松はじつと顔を見て「朝夕母アさまとお二人で、しみくお嘶なされるもの、何うして知らず居りませう、ア、健氣あると思ふよ、つけ、何故わたしは隠してお出のか、姉さんでもさ、片落さど、お恨み申して居りましたが、爾う訂

百二十四
明けて下すつては却つてわたしは濟みませぬ「詫ふればお春は首を振り」お
んの詫ぶるの詫ないの、姉妹仲に爾んを遠慮は要りません、わたしは家を
出た上は、お兩人様のおためあら何んお罪をも着る積り、爾うある時は最
二度と、此處へ歸ればしませぬゆゑ、お年寄られた母アさま、情願孝行して
お呉れ「云命とお松は答あ、袂と顔を押し包み、忍音と泣く慇懃らしき、母は
悲愴とすり寄つて「サア何時まで泣いて姉さんの、お邪魔をしてはありませぬ、
必ず二度と逢れぬと、極つた譯でもないものを、何故其様よお前は泣きま
か、十萬石のお城下よ、莫大な御知行頂戴いたされた、立派な方も多いのよ、誰
とて見向きもあらぬ中で姉さんばかりが彼の様よ、骨を折るのは母をは
じめお前まで、ホンニ面目過ぎたので、いかに、サ、最う泣き息んで機嫌よ
く、お首途の支度をば奥でこれからいたしませう」たしなめられてお松は漸
う顔を上げ「爾んなら母アさん、お前と二人でお支度を、イヤ姉さんも一所よ」

云んとするお春の横顔差し覗き、姉さんのためよは生命を捨てた孝助の、今
日が恰好四十九日、燈明をあげて、御回向を唱へてお遣りおされませ「云はれ
てお春は涙の眼元しばた、き、ホンニ孝助がためよも仇をば報ふかし、立
ち、爾んあらわたしは佛前へドレ挨拶をして來ませう。

第二十二回

「コレ手前は何んだ度々、御殿へ參つて、お取次をイ、ヤ断じて相成らぬ、ハイ
、左様もござりませうが、御前さまよは能く御存じよ入らせられませ、
鳥渡でよろしうござりませうから、情願お取次を、エ、五月蠅いとを申す奴ぢ
や、決して取次はあらぬと云ふよ、左様仰せられすと、永ふとは申しませぬ、僅
の間で苦しうござりませぬゆゑ、御前さまよ情願お逢はせおされて下さい
まし」此奴がまた何處まで五月蠅く申すのぢや、縦令口が耐になつても此の
方取次は断じてあらぬ、本庄公爵家の表立關よ、小腰を屈めて取次頼むは石

百二十六
「お春荒々しく云ひ捨て與へ入らんとする書生の袂引き止め」爾んあら
郎何うでもお取次は願はれませぬか」「エ、知れたとだ」振り放さんとするを
緊々地と引き止め「では甚だ恐れ入りますが、此處も些少の土産がござりま
す、情願は前様のお目よお掛け下さりませ」頼り云はれて流石に振りも捨
られず、大きやかある雞卵の折を受取りて、其ま、奥へ赴きしが、再び持つて
出で來り「湯前の湯目よかけては見たが、其方おどより斯様な賄賂がまじき
ものを、貴ふ覺えは少しもあいと、殊の外の湯立腹ぢや、最う此上の取次は何
んぞ申しても決して厭ぢや、サツサと此處を歸らぬか」「嘆み若く如く罵られ
て、お春はじつと俯視き居りしが、靜かお折を手許よ寄せ、それでは賄賂だと
仰やいましたか」「芳志はたしかお受けたが、無禮な品は取らぬとの仰せだ」お
春は柳眉をじりりと逆立て「芳志をお受け遊そばしたのあらば品物お取り
おされたも同じと、わたしは」持つては歸へりませぬ「書生は威丈高も庵ひか

ハッて持つて歸らずば何うするのだ」何うも仕はいたしませぬが、湯覽遊ば
せ、斯様よします」折の蓋を取るより早く、百箇あまりの鶏卵手あたり次第よ
掴み出して、金泥極彩色の屏風は素より研ぎ立たる柱對立窓赦はあく、發矢
くと投げ附くれは、見る間に一面穢れ果、脚の立途もなき程なり、泉氣よ取
られし書生の漸う心着き、狼籍ものめ「大喝一聲、うしろの方よりむんづと紐
むを、何を遊ばす」腕よは受し柔術の秘傳よ、早くも取つて撞と投げ出し、奥の
間差して入らんとする折、玄關よ狼籍もの、あるやうぢや引つ捉へて此處
へ引け」聲はたしかよ公爵と覺しく、即座よ荒くれ男六七人、宙を飛んで駆來
り「神妙よいたせ」言下に取つて早細打ち、前後を圍んでお庭口より、書院の前
よ引き据ゆる、垂れたる籠を半まかせて、優然と褥に坐はるは、本庄公爵、薄き
眼將左手よ捻つて、屹度見かろし「コリア女、見覺えもあき此方よ、何んの意恨
があつて狼籍いたす」お春の首を垂れたるま、默然として言葉あし、公爵四

下を見まはして「其方どもは庭木戸締めて表へ参れ此女は此方自身よ訊問いたす」廣やかある庭上か春の外も人もあし公爵膝を前めて聲低く「か春好く此方の意中を悟り旨く狼籍を遣ったのウ」か春はかそるく「頭を上げ」「下腹の身をも願す飛んだ無禮をいたしました」イヤ何んのこれが無禮であらう予實は度々参ると聞き逢つて漸をいたしたいと心の中では思つて居たが逢へば後日が面倒ぢや、ハテ好い工夫がと案じ出した今日の一寸女あがらも流石はか春ぢや、ウム、イヤ天晴な手際兼美感心いたした「これはか言葉は預りまして恐れ入ります、實は遠田伯からか聞き及びもありません、通り、マア累卵と申しませうか、明日をも知れぬ松平のお家探ちよ探つて見ますれば、怖ろしいと怪しいと、一日半時の猶豫も安心ありませず、いろくか頼み申しまして、何方も知らぬか顔ばかり、最う此上は、伊前さまから、伊説諭をお願ひ申しまして、殿さまはじめか姫さまの、早ふか添ひ遊ばすやう、

情願を取計ひを願ひます」公爵は眼を杜ちて言葉なし、か春の尙も座を前め「失禮ながら伊前よは、かねく、子爵を伊最負よ入らせられ何かとお引立よなりましたるとあれば、飛んだ間違ひの起らぬ中、好い伊思案遊ばして下さるやうか願ひ申し上げます」公爵は眼を開いて屹度見おろし「然らば何んと申す、マメ其方は權門紳士の手を借りて、危急よ逼る子爵の身を其手で救ひ出さうとするのか」強ち便りよいたすと云ふではござりませぬが、何分警固が厳しくて、イヤ左様お其方の了簡あら、最早この方面會無用ぢや、か春は愕然として顔を上げ「ナニ伊目通りが伊無用とは、云ふて聞かすも無駄なれど、松平目下の形勢は、如何はと權門有司よ取入つて、其方が盡力いたすども、左様おとでは覺束あ、思へば先頃尼岡が、所詮お春如きの女で、何と事の序よ話した言葉、今更かもひ當つたわい」惘然として語ればか春の顔打報め「素より未熟おわたくしゆゑ、爾う覺し召すも伊道理よ、ござりませぬが、一旦

思ひ立ッたる身の願ひ、縦令骨が舍利とありましても、逆り通したいと存じ
ますれば、不束なところは幾重もか指圖遊ばし下さるやう、か願ひ申し上
げまする「イヤ何んと其方が申しても及ばぬとちや危ふき望みを起そうよ
り分相應よして居るが、其身の得と云ふものぢや」ソリや簡程までよか願ひ
申し上げて「此方は存ぜぬが、素氣なく云ひつゝ、四下に落散る書冊を取ッ
て繰ひろぐ最初よ似氣なき公爵の様子不審どか春は胸よ思案しつ、再び顔
を打もたげ、彦前さまが左様よ素氣あるや仰やッては、最早力ど頼む木影もあ
く、春と途方よ暮れまする」怒然として打ち沈めば、公爵あがめて冷笑ひ「これ
程云ッても其方の耳へは遣入らぬか、かゝる大事を企つものが、人の力を頼
みとして、それで遂げ得るものと思ふか、コレ能く考へても見るが、好い金銀
財寶よ糸目を呉れず、賄賂よ口を杜ぐ奴輩、其方が歎いて廻ればとて、何し
よ利目があるものぢや、そりや此方より表むき云へば云はれぬ筈はなけれど、

公事よはそれ相應、彼方よ用意もしてある道理、それを執念く扨いた日よは、
思はぬどころよ罪人を幾人出すか、これも分ならず、爾う云ふ事情もあるの
みか、先を潜入ッて疑へば、奸賊どもに用心あッて、或一不祥のともあらば、
その時其方あんといたす「エッ」サア無駄と云ふのは、此處のとちや、遠田伯の
お嘶しでは、生命はかねて無いもの、覺悟を極めて居るとか申すが、縦しや
女童の細腕でも、一命かけてする仕事よ、此様も無様があるものか、大事の前
の小事と云ふり、此處等のとちや、氣が注かぬか、イヤ見下げ果たると申さふか、
腰抜ものど笑はふか、他人事あがら齒痒ふて、顔を見るのも胸が悪いワ」意味
あり氣ある言葉の端々、お春は両手を膝よ置き、熱々考え居たりしが、何か心
よ悟りけむ遙かよ此方を仰ぎ見て「左まで未熟と覺し召さば、強ッてお願ひ
申すも無益と、彦前さま飛んだか邪魔をいたしました」腰細解いて立ち上
るを、苦々し氣よ見かくとて「以來は決して足踏みいたすぢや」この世で二度と

は参りませぬ「見むきもせず一散は駆ゆく姿じつと磨めて思はず莞爾と笑
溢す。

第廿一回

「春また取出して涙の種か最う能い加減に磨めて仕舞へ清潔とせし乾淨房
の障子を開いて裡に入るの松平子爵今湯あがりを見て髪も髭も美しく
装ひ、一樂織二枚小袖一本八丈の下着を重ね、琉球蚊飛白の羽織の紐を結び
あから優しく云ふ形見こそ今は仇ある名残の小袖膝は載せたるまゝ、茫然
として見とれ居るか春の子爵の聲は涙隠して此方を見返り「オ、すがく
どお立派なサツお快ようござりませう」子爵の火鉢の側は座を構ひ「寒風よ
晒されて薄き毛布に夜の長いを歎いたハッこの頃のとちや思ひぬ其方
の辛勞と此處の主人の親切から先づ予一人は斯ふおつたが思ひ出して
氣の毒をのの梅子どの」云ひつゝ、臉をしば叩くお春もホロリと一滴袖に落

して「あれはさよ暮つてお出遊ばしながらしみくものも仰やつたとな
く、サツは残念と思し召たであらうと、わたくしは思ひ出されてありませぬ
「去年霜月下句ころから先月の中旬までと云ふもの、折く人傳またより
も聞き、又手のたよりもいたして居つたが爾後のバツタリ不通とあり、何し
て居られる事すとわが身の不運を思ふよつけても、片時わすれたといふ
が、おせ自殺なきを爲たものか、實に不審で堪へられぬ」その自害といふと
も表向よの隠して居しやると申しまするが、遠田さまの殿さまのお文でも
たしかは自害と見へまする」子爵の悄悄として手を拱きたるまゝ、言葉な
し、お春の涙一ばい臉は湛へて小袖の襟際さすり居りしが、何やら不圖指
觸るゝが訝かしく縫目深く探りて見れば、襟裏の綿を包みし紙と覺しく
右より左へ長く折まはしたる様子あり、若しやと子爵は目くばせしつゝ、忙
はしく解き放せば、白き薄葉の巻紙は細々と記して襟の長さよ巻き締め上

よ今様の筆の運びも麗はしく「書置の事」と記されたり、お春の見るより又い
まさらようち驚き封目切つて子爵は渡せば子爵の急も受けて讀み下す

書置の事

前の世の報ひ思ひ諦らめし身も今を名残りとかもひしへば何とや
ら惨懐かしさよ心かくれしまゝ、拙なき水菫の跡、惨じさせしはんと
のおん耻かしさも打忘れ、此世の惨告別までよわざと一と筆書き
遺し、緒とや私事如何なる月日の下、生れしよや歎もあらぬ
身の涙き惨情もあづかりしと生々世々のおん嬉しさ何時の世も報ひ
まぬらせし折もあるまじくと染々かん禮す上し
左様いへば今更申し上ぐるも憚かる事、いへば日外、惨母上
に私の身をおん引き取り下されし事、いへば家令中島強一との沼田
男爵殿とが深き巧ありし事と存じ侍りしに故と申ししへば極悪非

道の沼田殿に、私の身を我がまゝにせんと、の心より中島どのと心を
合せあまたををお苦しめ申し、私の身を沼田殿まかせんものといろ
く、謀みし事相分りしゆゑ、私の身生き永らへ居りしに、あまたを
の惨身の上、よまで惨迷惑を相掛けしのみならず、極悪非道の者共の爲
め、よ遂、いへばあなたをの惨身の上、かん危うく又私の身の上も如何あ
る辱めもあらんかと思ひしへば、身一つの遺る瀬もなく、生き永らへ居
りしに、あまたをへ對する操を破り、二つよ、いへばあなたをの惨身の上も如何
と存じ、私事心を決じし、うへ身を殺して操を立て、あまたをの惨身の上
の惨安全を祈り、まぬらせし間、なにぞぞかん察し下されしよ、よふかん願
ひ、上し、いへばあなたを、いへばよろづの事、よかん心を付けさせられ、かん身の
上の惨安全を、いへばかり下されたく、私の兩親の事、よろしくかん心添か
んねが、いへば上し、次に春事奉公人、いへば有るまじき、心立主の事をおもふ

百三十六
てその身を忘るゝ事のたのもしさ同人身の上も恐れながら未永くお
ん側よかん召使ひ下されぬいゝかん嬉しく存じ上まぬらせぬまづの
散りて行く身の心みだれし上ぐる事も前後いたしあらくのみ書き
廻しまぬらせぬ

怒平定成様 御元之

遠田梅子より

と讀み了りて子爵の春と顔見合せぬ梅子どのの予よ操を立て、此
世を去られたる事の悲しさおるへやく逆臣原の極悪非道憎みても餘り
あり、それよしても怒然あるの梅子どのの我れゆゑよ貴き玉の緒を切り今ま
咲き染めし花の香を散りて失せたる真心のその心底を思ひ出せば予の堪
へられぬわいと、思はず男泣きに泣き出す思ひの同じ思義あか春これも前
後正体なく泣き轉々歎きの數の數々を記者も貰ひ泣して寫し出すこと叶

ハナシ讀む方々へおん察しあれ。

彼の松平子爵の家令中島強一に申すよ及ばず沼田男爵一味の者の既よ殺
人罪の嫌疑を以て今ま其筋の取調中なり子爵の貞操ある梅子姫及び思義
なるか春の爲めよ其身を安全の地位よ置く事を得たれば殺人罪の嫌疑者
たる一味徒黨の處分了りたる上亡父君並に梅子姫忠僕孝助等の靈魂を慰
むる爲め一大供養を催さんと目下之れが準備中あり世の文明よ進みしよ
も拘はらず此の如き極悪非道の人間が多くていあかくよ安心の出来ぬ
事ならずや悪き者の早く殿重よ處分して首を斬るべきものハ斬つて仕舞
ふが宜し。

小説 梅 完結

明治二十七年四月七日印刷
明治二十七年四月廿六日發行

(定價金二十五錢)

著者兼
發行者

東京市神田區五軒町貳十番地

加藤由太郎

印刷者

東京市日本橋區新和泉町一番地

瀧川三代太郎

發行所

東京市日本橋區通三丁目十番地

鳳林館

印刷所

東京市日本橋區新町一丁目
今

6/11/36

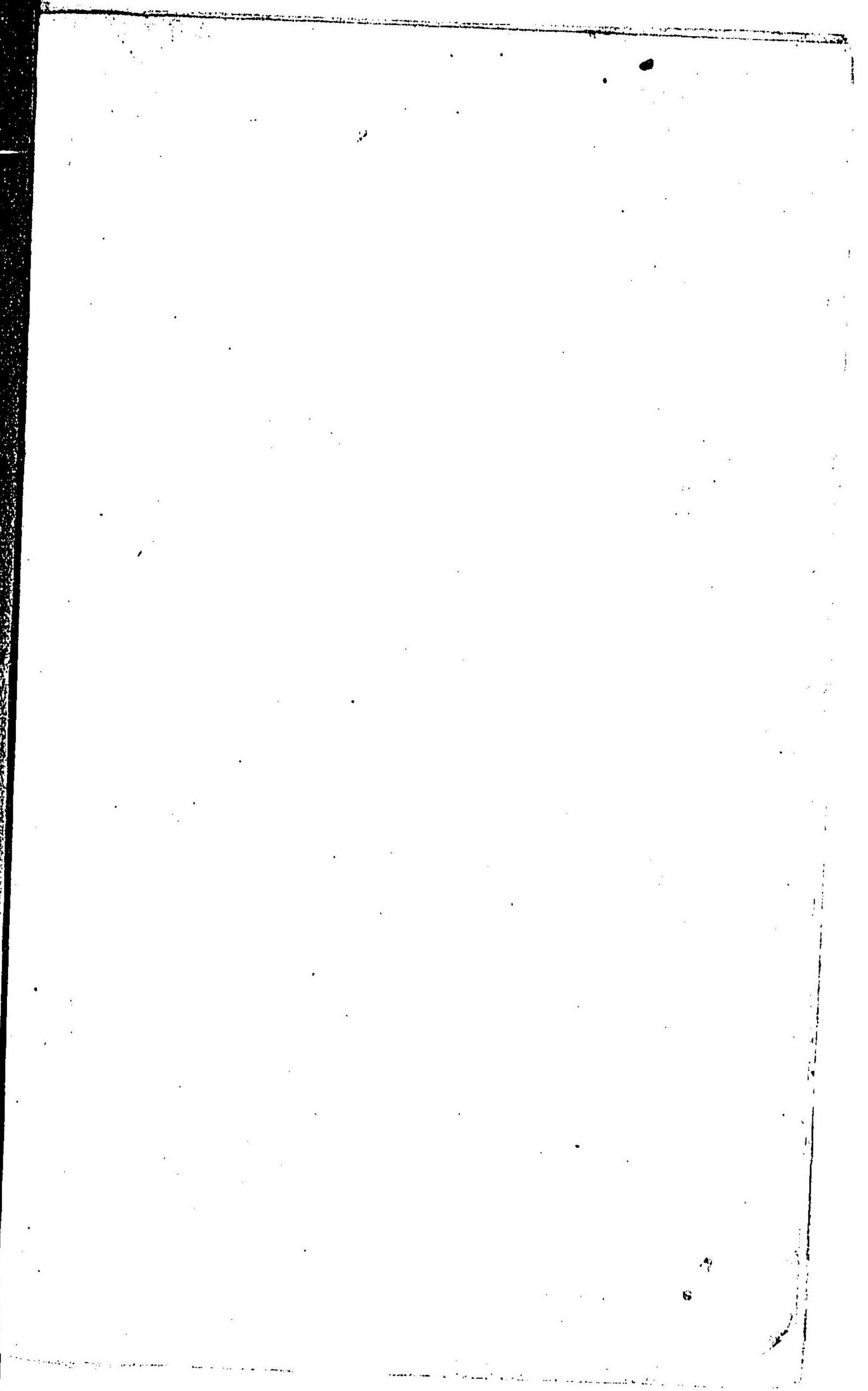
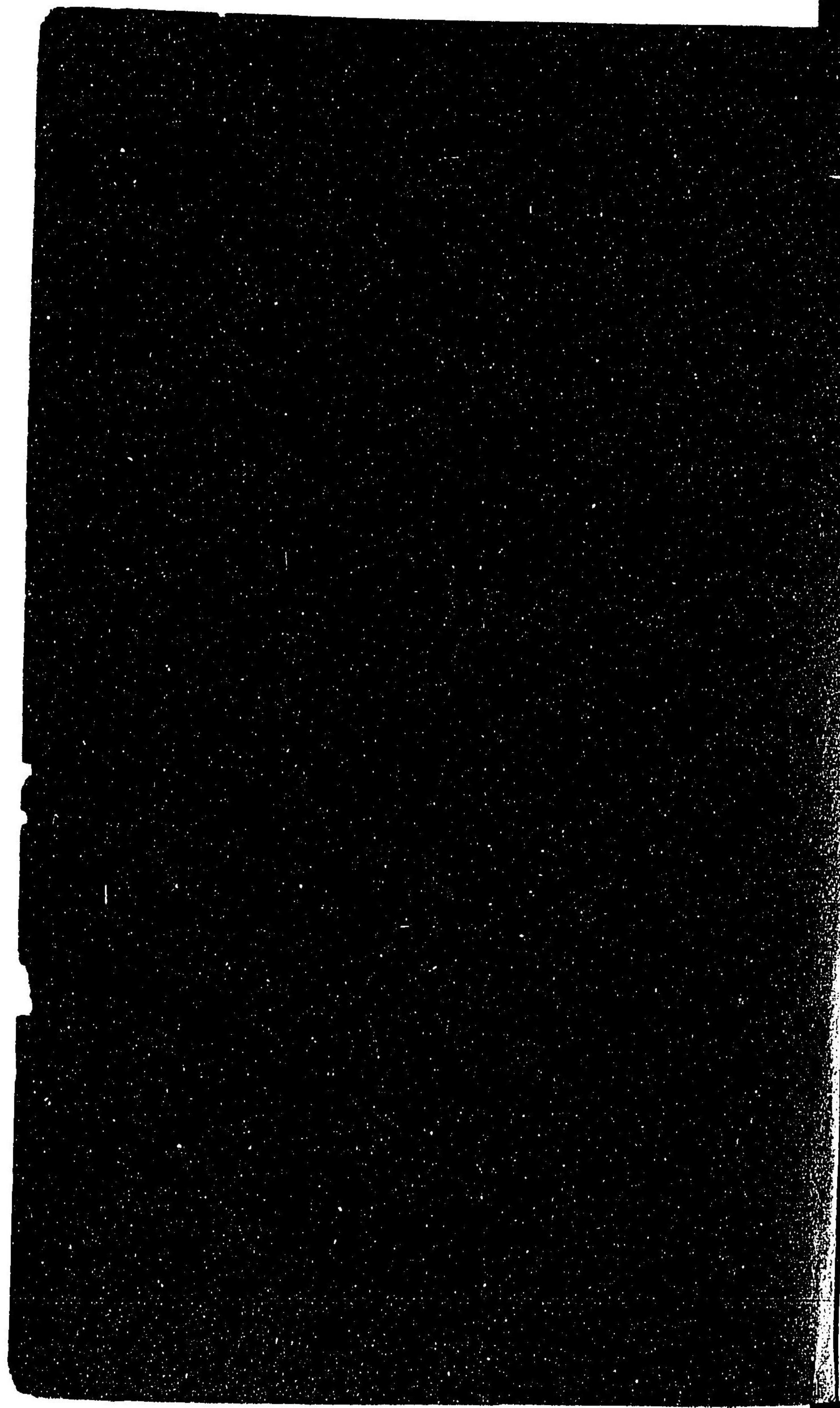
これほれ梅

版權所有

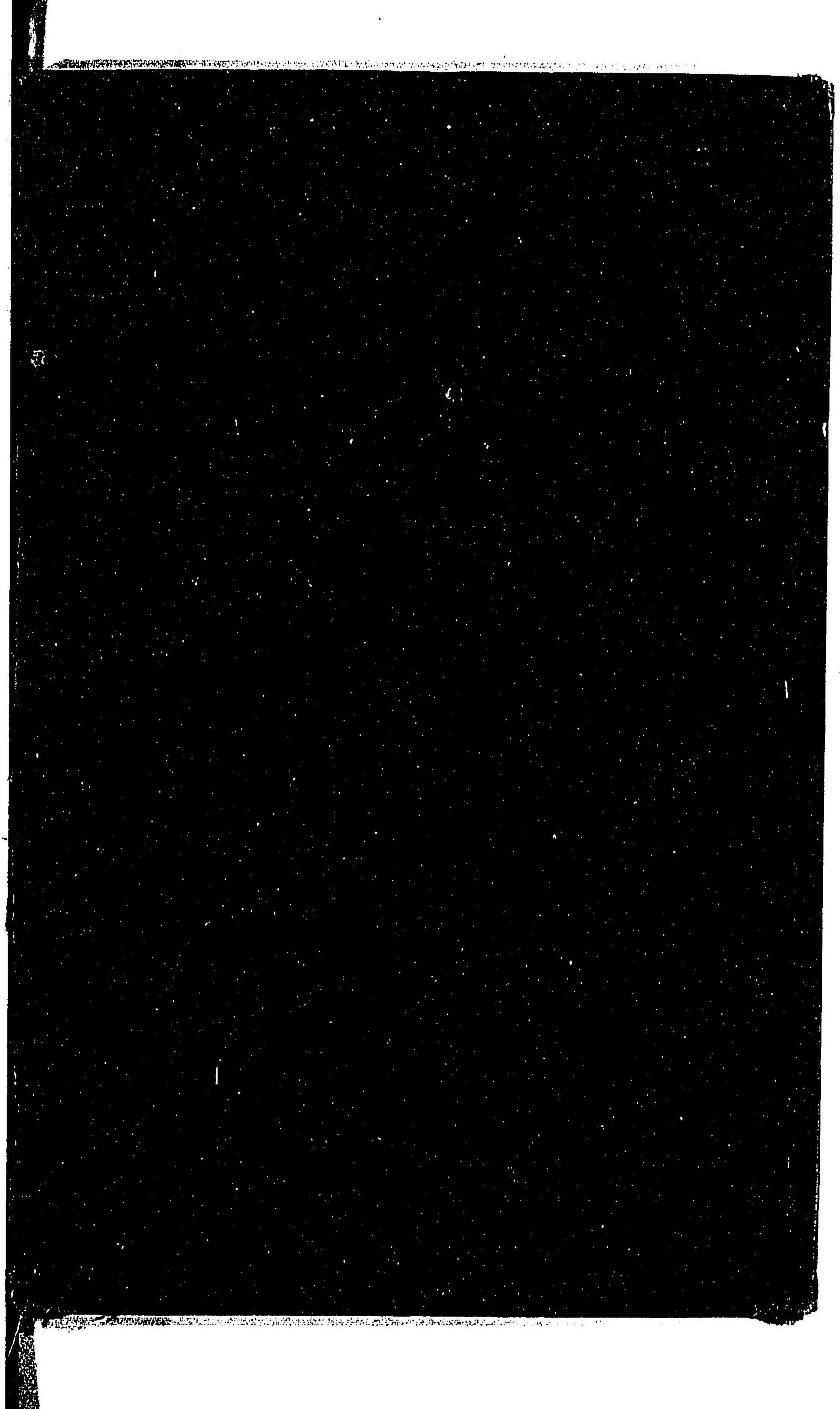
誤植と

注意

本書「これほれ梅」の主人公は梅子嬢と呼ぶ姫君にて其侍女はお春と云ふ然るに植字の誤りにて此名を變じ居る所あり依て重なる關係者の名を特に掲げ置き候故看客諸君は御推讀あらんことを主人公伯爵令嬢遠田梅子、子爵松平定成、男爵沼田大佐、家扶中島強一、侍女お春等は則ち本書重なる關係者なり依て注意の爲めに一言致し置候



111
215



44
215

M

093768-000-7

44-215

こぼれ梅

蚯蚓庵主人/著

M27

DBQ-1189



